2007年

第4回日韓・アジア教育国際会議

— 香港 —

第4回　日韓アジア教育国際会議・学生交流

日　時	2007年8月5日～7日
会　場	香港大学本部大楼陸佑堂MG07
主　催	日韓・アジア教育文化センター
	香港大学　現代語言及文化学院
後　援	国際交流基金〔市民青少年交流事業〕
	香港日本語教育研究会
	香港日本文化協会
協　賛	香港留日学友会
	香港華夏書院日本研究所
	港日文化・教育交流基金

会議の主題

モノリンガル・バイリンガル・トリリンガルと自己表現と言葉の教育 ～その各地域での現状と課題～

《主題設定の背景と私達の認識》

1990年代以降急速に進む IT化、ヒトとモノの大移動とグローバル化、そして英語が世界語［国際語］であることを常識とする現在、マクロレベル（国家、地域、社会など）での言語政策とマイクロレベルでの個人と言語の関わりを、地域そして特に若い人達の実際から考えることは、国際化と地域とアイデンティティに係る問題提起となる、と考える。
また、このことはアジア・東アジアでの日本・日本語の課題とも重なる課題である。

《この主題に到った経緯》

日本でのバイリンガル・トリリンガル優位的視線の中で彷徨い、苦しんでいる、
・モノリンガルの若者たち
・海外帰国子女の一方的イメージに苦しむ“隠れ帰国子女”
・両言語とも中途半端状態に苦しむ外国籍を持つ“宙ぶらりん外国人子女”
が、多数存在することをしっかりと受け止め、自己表現について、また言葉と教育についてあらためて考えたい。
尚、これらの課題は日本だけのことではなく、例えば韓国の海外帰国子女教育にあって現在、顕在化しつつある。

現地語と日本語とのバイリンガル、更にはトリリンガルに係る現地での関心理解と日本の位置
これは、現地語と先ず英語が、バイリンガル・トリリンガルという考え方の現在と国際社会について考える一つの指針になるのでは、と考えている。
またそれは、言葉は伝達の道具、という時の意味・内容とも関わって来るのではないか、と考えている。

昨年の会議での香港の教員の発表「私は中国人？ 香港人？ 国際人？」
この発言は、中国語（広東語）と英語のバイリンガルが日常的な香港にあって
そのアイデンティティの問題とも関わる興味深いものであり、地域と歴史から人と言葉を再認識する契機となった。

第4回 日韓・アジア教育国際会議発表者・出席者 一覧

地域	名　前	性別	所属	ローマ字表記	滞在期間
日本	森本幸一	男	教員	MORMOTO KOICHI	4日－8日
	石山由美	女	教員	ISHIYAMA YUMI	4日－7日
	岡野林太郎	男	教員	OKANO RINTARO	4日－8日
	井 嶋悠	男	センター	IJIMA YU	3日－8日
	逢坂芳郎	男	映像	OOSAKA YOSHIRO	2日－10日
	里 才門	男	映像	SATO SAMON	同上
	粟田経弘	男	映像	AWATA TUNEHIRO	同上
	大橋真由美	女	学生	OOHASHI MAYUMI	5日－8日
	河野祐子	女	学生	KAWANO YUKO	4日－8日
韓国	呂 善九	男	教員	REOU SUNGU	4日－8日
	朴 且煥	男	教員	PARK CHAHWAN	同上
	孔 美景	女	教員	KONG MIKYUNG	同上
	金 浩顯	男	学生	KIM HOHYUN	同上
上海	陳 娅	女	教員	CHIN A	同上
台北	武藤泰子	女	教員	MUTO YASUKO	同上
	工藤節子	女	教員	KUDO SETSUKO	同上
	林 暁婷	女	学生	LIN XIAO TING	同上
香港	マギー 梁	女	教員	MAGGIE LEUNG	
	黄 倩婷	女	学生	WONG SIN TING	
	陳 禮斌	男	学生	CHAN LAI BUN	
	陳 嘉浩	男	学生	CHAN KA HO	
	趙 浩澄	男	学生	CHIU HO CHING	

会議の日程と内容

（敬称略）

8月 5日［日］

9時 30分～ 10時 ――― 開会

10時～ 12時

各都市・地域からの主題に係る現状と課題・質疑応答Ⅰ

①日本

・今回の主題と日本の現状 …… 井嶋 悠

・日本と英語教育、また多言語教育 …… シャミ・ダッタ(ビデオによる発題)［千理国際学園社会科］

・シャミ・ダッタ氏の発題への感想 …… 里 才門［映像作家］

②韓国

・「帰国子女適応教育の実態」…… 朴 且煥［高明情報産業高校日本語科］

14時～ 15時 30分

各都市・地域からの主題に係る現状と課題・質疑応答Ⅱ

①台湾

・「越境した教師のアイデンティティ―中等教育の日本語教育にわる教師の事例―」…… 藤 節子・武藤泰子［台湾東海大学］

②香港

・「香港の教育改革における言語教育政策と多言語社会の行方」…… マギー梁 安玉［香港日本語教育研究会副会長］

③意見交換・自由討議

16時～ 17時

主題に係る講演

・「香港のメディアと言語教育」…… 夏 妙然（香港電台教育番組制作担当）

・「香港における生涯学習の日本語教育の変遷」…… 佐々木恭子（香港日本文化協会 日本語講座校長）

8月 6日［月］

10時～ 12時

今回の主題との関わりの中での「国際化＝移動」の時代での子どもの教育に係る講演

・「文化と言語：国際化の中での言語教育」…… 岩見武夫（港日文化・教育交流基金代表）・岩見龍馬(香港理工大学非常勤講師)

13時 30分～ 16時 30分

ワークショップ

昨年の学生交流ドキュメンタリー映画『東アジアからの青い漣』上映と自由討議～制作者・前回参加学生を交えて～

17時～ 18時

日韓・アジア教育文化センターの今後に係る全体意見・交換会

8月 7日［火］

10時～ 12時 30分

学生会議（香港・上海・台北・ソウル・大阪）

・各学生からの報告と意見

・各国・地域から一人ずつの発表

「私と表現、あるいは外国語～4日間の交流を通して～」

Ⅱ　学生による討論

Ⅲ　参加者全員での討論

12時 30分～ 13時

今回の会議からの提言 …… 呂 善九（ソウル日本語教育研究会長）

目　　次

発刊の辞 ／ 井嶋 悠［日韓・アジア教育文化センター］…… 06

発言者レジュメ

◎各都市・地域からの主題に係る現状と課題・質疑応答

【日本】

・日本と英語教育、また他言語教育 ／ シャミ・ダッタ（ビデオによる発題）［千里国際学園社会科］…… 08

・参考資料：今回の主題と日本の現状 ／ 井嶋　悠［日韓・アジア教育文化センター］…… 10

【韓国】

・「帰国子女適応教育の実態」／ 朴　且煥［ソウル日本語教育研究会］…… 20

【台湾】

・「超越した教師のアイデンティティ―中等教育の日本語教育に関わる教師の事例」／ 工藤節子・武藤泰子［台湾東海大学］…… 24

【香港】

・「香港の教育改革における言語教育製作と他言語社会の行方」／ マギー梁　安玉［香港日本語教育研究会副会長］…… 28

◎今回の主題との関わりの中での「国際化＝移動」の時代での子供の教育に係る講演

・「文化と言語：国際化の中での言語教育」／ 岩見武夫［港日文化・教育交流基金代表］・岩見龍馬［香港理工大学非常勤講師］…… 31

◎主題に係る講演

・「香港における生涯学習の日本語教育の返還」／ 佐々木恭子［香港日本語文化協会　日本語講座校長］…… 35

・昨年の学生交流ドキュメンタリー映画『東アジアからの青い漣』上映と自由討議～制作者・前回参加学生を交えて～ **（巻末参照）**

◎日韓・アジア教育文化センターの今後に係る全体意見・交換会 …… 37

◎学生会議（香港・上海・台北・ソウル・大阪）

・私と表現、あるいは外国語～４日間の交流を通して～

日韓・アジア教育文化センター ホームページ「映像アーカイブ」ページ参照（各国・地域から一人ずつ発表）

参加記 …… 39

発刊の辞

井嶋 悠
［日韓・アジア教育文化センター］

2007年8月に、香港で開催しました、第4回日韓アジア教育国際会議と学生交流の報告書が、私たちの活動に賛同くださる方々の賛助を得て、ここに発刊できますこと、先ず深く御礼申し上げます。

私たちの活動での理念とその具現化につきましては、後一歩の歯がゆさの連続ではありますが、東京圏等での新しい出会いもあり、それを励みと支えに横歩きを前歩きへと転換するべく日々努めています。そしてこの報告書もその活きた一端となれば、と密かに願っています。

尚、学生交流からのメッセージは、昨年の上海開催と同様のスタッフと新しく1人の協力を得て、ドキュメンタリー映画を現在編集、制作中です。完成の暁にはあらためてご案内致しますが、この報告書の裏表紙に現状等記していますのでご参照ください。

個人的なことになるかと思いますが、私が、ここ１、２年実感を強めつつあります思いを、昨年のドキュメンタリー映画『東アジアからの青い漣』に付しました解説から一部引用致します。

今アジアの時代だと言う。
これは、ひょっとして感性研ぎ澄まされた西欧人からの言葉かもしれない。
しかし、アジア人の中にあって文明を謳歌する私達が得心していることも間違いない。
森と水、自然と人の融合。夢想でないその過去の事実。
「アジアは一つである。」但し、自然と人々の融和、そこから編み出される美の意味で。
「言い得て妙」「有限にして無限、無限にして有限」「１と０」、心の繊毛（ひだ）が織りなす宇宙的想像に“美”を直感する人々は、アジアの心を“直覚”するが、明快な言葉を紡げない。紡げないが、その人々の中に東西を越えた真と善と美は確実にある。
特に今。
分割の知性の世にあって、直感は曖昧な情緒、感傷［sentimentality］として排撃の対象にさえなる。
（中略）
「この有限の世界に居て、無限を見るだけの創造的想像力を持つようにしなくてはならぬ。この種の想像力を、自分は、詩といって居る。この詩がなくては、散文的きわまるこの生活を、人間として送ることは不可能だ。」に共振し、「東洋民族の意識・心理・思想・文化の根源は、母である。父ではない。」に肯く。
森と稲と水の文明、揚子江文明の河口、太平洋へつながる、喧騒の近代象徴都市上海。
海という文字にはかって母が居た。今、二つの点は一本の直線に合理化され、母は消滅した・・・。
孤絶する母、混乱する父、その間で彷徨う子ども達若者達。そして私達。
「アジアの時代」！？「アジア的価値」！？「アジア的感情」！？の、更には、今と明日での「日本の存在」！？の“！？”に直感し、想像し、自身の言葉を搾り出す、そんな時間を、と思う。心が亡くなると書いて忙しいという漢字との別れを希って。（後略）

最後にあらためて1993年来会議と交流を続けてきましたことへの感謝と、そして来年2008年の台湾での開催、さらにはそれ以降の継続的発展に関心と助言を寄せていただけますことを重ねて願っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

発言者レジュメ

多言語社会出身のインド人から見た日本の英語教育［ビデオ発表］

Shamm iDatta
［千里国際学園］

［発表者の略歴・背景］

1969年インド・ニューデリー生まれ。13歳で来日後、東京のインターナショナルスクールで中学・高校時代を過ごし卒業後、ICU(国際基督教大学・歴史学専攻)に入学、1990年からアジア研究・日本研究のためにカナダ・ブリティッシュコロンビア大学大学院で日本歴史を専攻。

歴史的事実が、現代の日本文化・習慣などにどのように影響しているかなどを研究。

1992年より、私立「一条校」とインターナショナルスクールのジョイント校千里国際学園に勤務。大阪インターナショナルスクールでは英語で日本史の授業、千里国際学園高等部では日本史・現代社会の授業などを担当。

発表内容・主な項目

①自己紹介と千里国際学園での授業担当

□ 担当授業については、上記「略歴・背景」を参照

②自分の言語習得の歴史・経緯

□ 現在、英語・日本語・ヒンディー語・パンジャビ語を使用しているが、第1言語は英語である。日本語は、「聞く・話す・読む」は公私対応できているが、「書く」については難しさが、現在もある。

③インドにおける言語事情と英語および言語教育事情

インドは公認語としてヒンディー語、英語の他に17の言語［他にも各州での公用語もある］がある多言語社会であり、相互の意思疎通を図ることの必要や国際化時代での要請からも、18世紀半ばから第2次世界大戦後［1947年］までのイギリス植民地支配・統治と言う歴史的背景を基に、英語教育が、各州・各地ではそれぞれの言葉に加えて、私立学校は小学校から、公立は６年生から行われている。

【参考】インドの教育制度・事情概要

○義務教育としての初等教育（6歳～14歳の8年間）

但し、5年間を「初等学校」とし、残りの3年間を「上級初等学校」とするが、上級初等学校の就学率は50%前後である。

《備考》

☆初等教育の徹底と国民教育の拡充のための学校設置

『ノンフォーマル教育センター』の設置

初等学校中途退学児童や家庭事情等で通学困難児童のための学校

［運営は市町村・市民団体等。経費は国と州が負担］

○中等教育　4年間［14歳～18歳］

前期2年：中等学校　　後期2年：上級中等学校

《備考》

中途退学や家庭事情等で通学困難生徒のための学校

『公開学校 (NationalOpen Schools)』の設置

○高等教育

大学・カレッジ

カレッジ：学士レベルの教育

大学：大学院レベルの教育

大学院

④日本の英語教育に関しての私見

□ 徐々に改善されつつあるとは言え、実用性への成果に問題点のある中学・高校での英語教育の一層の見直しが必要であろう。

□ 国際化の進行に伴って英語の必要性が、高まっているが、日本社会の場合、その必要感については地理的、歴史的経緯からも個人差が大きく、時には生涯必要としない人も多い。

このような現状にあっては、必要と個人の感覚を大事にして、例えば中学からの必修制度自体を検討することがあっても良いのではないか。

２００７年7月３０日
千里国際学園にて撮影収録

撮影者：中村亮介
［千里国際学園社会科］

第4回日韓・アジア教育国際会議「モノリンガル・バイリンガル・トリリンガル」に係る日本からの発表理解のための統計等資料 (2007、8、5)

[作成者：井嶋 悠]

Ⅰ 日本国内の学校状況

1 学校数等

【備考】□少子化と学校存続危機

□大学の大衆化

□大学院前期博士課程(修士課程)進学者の増加

● 学校数・在学者数・教員数（2005年5月1日） (Unit: schools, persons 単位: 校、人)

No. of Schools, Students and Teachers (5/1/2005)

		Schools 学校数	Students 在学者数	Teachers 教員数		
Universities	National	87	627,851	60,937	大学	国立
	Public	86	124,910	11,426		公立
	Private	553	2,112,306	89,350		私立
	Total	726	2,865,067	161,713		計
Junior colleges	National/Public	52	15,990	1,454	短期大学	国公立
	Private	428	203,367	10,510		私立
	Total	480	219,357	11,964		計
Technical colleges	National/Public	60	56,804	4,315	高等専門学校	国公立
	Private	3	2,356	154		私立
	Total	63	59,160	4,469		計
Senior high schools	National/Public	4,097	2,536,322	191,593	高等学校	国公立
	Private	1,321	1,068,921	59,820		私立
	Total	5,418	3,605,243	251,413		計
Junior high schools	National/Public	10,314	3,383,910	235,413	中学校	国公立
	Private	721	242,506	13,275		私立
	Total	11,035	3,626,416	248,688		計
Secondary education schools	National/Public	10	3,488	276	中等教育学校	国公立
	Private	9	3,968	284		私立
	Total	19	7,456	560		計
Elementary schools	National/Public	22,930	7,126,510	413,184	小学校	国公立
	Private	194	70,950	3,605		私立
	Total	23,124	7,197,460	416,789		計

★Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology 文部科学省「学校基本調査」 Note: Does not include correspondence or miscellaneous schools. The number of university students includes graduate school students. Figures are estimates. 通信教育と各種学校は除く。大学在学者に大学院生を含む。速報値。

2.外国人留学生

2004年の日本への留学生総数は過去最高で11万人を超えた。中国からの留学生が最も多く、全体の66.3%を占める7万7713人で、前年より6899人の大幅な増加となった。

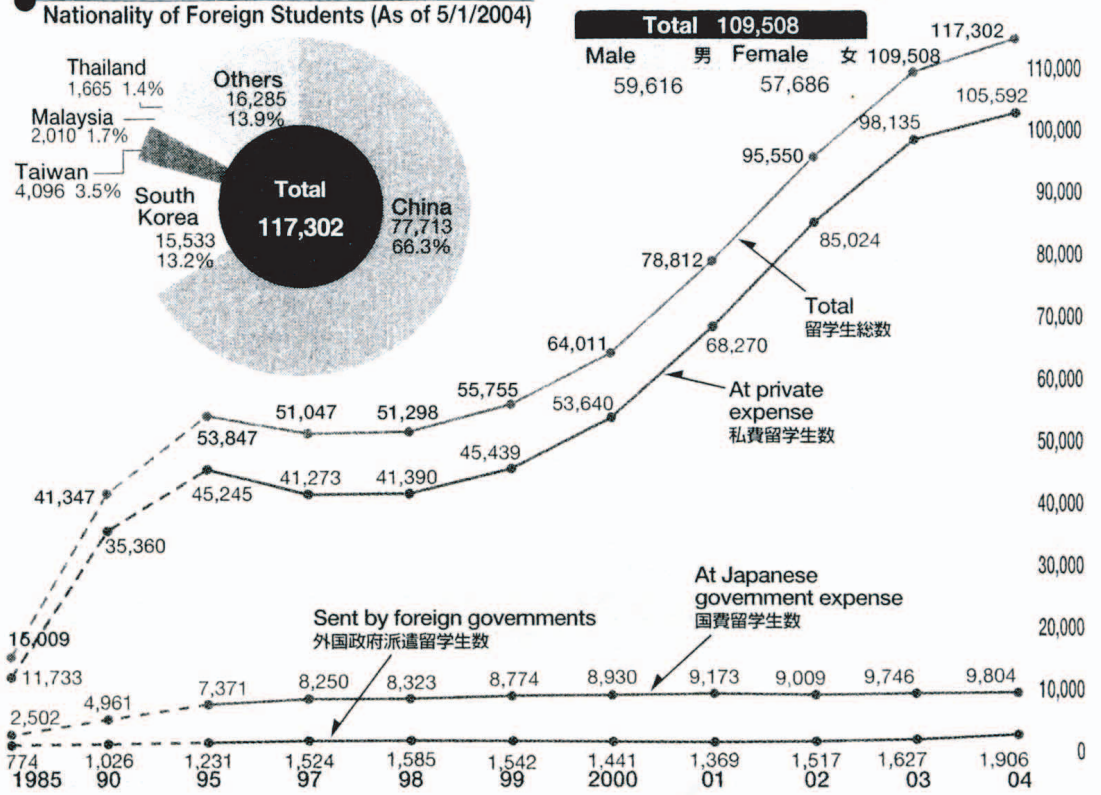
The total number of foreign students studying in Japan in 2004 reached a record high, exceeding 110,000. Chinese students comprised the largest number at 77,713, or 66.3 % of the total. This was a substantial increase of 6,899 over the number of a year earlier.

出身国・地域別留学生数（2004年5月1日現在）
(Unit: persons 単位: 人)

Nationality of Foreign Students (As of 5/1/2004)

外国人留学生の数 (Unit: persons 単位: 人)

Foreign Students in Japan



★Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology 文部科学省「留学生受入れの概況」 Note: As of May 1 each year. 各年5月1日現在。

在学段階別の留学生数 (Unit: persons 単位: 人)

No. of Foreign Students by Educational Level

Educational level	No.	在学段階
University (undergraduate)	58,324	大学（学部）
Graduate school	29,514	大学院
Specialized (vocational or professional) school	23,833	専修学校
Junior college and technical college	3,987	短大・高専
Preparatory course	1,644	準備教育課程
Total	**117,302**	**合計**

★ Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology 文部科学省「留学生受入れの概況」

留学生の多い大学 (Unit: persons 単位: 人)

Universities with Large No. of Foreign Students

	Name of university	No.	学校名
1	U.of Tokyo	2,056	東京大学
2	Waseda U.	1,769	早稲田大学
3	Ritsumeikan Asia Pacific U.	1,734	立命館アジア太平洋大学
4	Kyoto U.	1,240	京都大学
5	Nagoya U.	1,194	名古屋大学
6	Josai International U.	1,189	城西国際大学
7	Osaka Industrial U.	1,168	大阪産業大学

★ Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology 文部科学省「留学生受入れの概況」

04年の訪日外国人、最多613万人

A Record Number of 6.13 million Foreigners Visited Japan during 2004

目的別訪日外国人旅行者数

No. of visitors to Japan from abroad, by purpose

(Unit:persons 単位:人)

	Long-term visitors 滞在客	Temporary visitors 一時上陸客	Total 合計
2000	4,614,193	142,953	4,757,146
2001	4,627,713	143,842	4,771,555
2002	5,101,879	137,084	5,238,963
2003	5,069,214	142,511	5,211,725
2004	6,005,464	132,441	6,137,905

★国土交通省「観光白書」

3 .日本語学習者

【備考】□ニューカマー

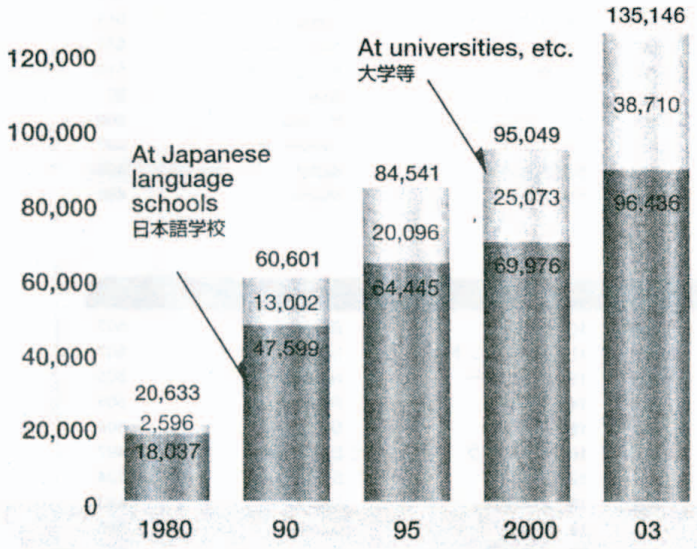
□外国人労働者

□帰国児童生徒

□国際結婚

日本語を学ぶ外国人数（国内）

No. of Foreigners Studying Japanese (In Japan)



★Agency for Cultural Affairs　文化庁「国内の日本語教育の概要」

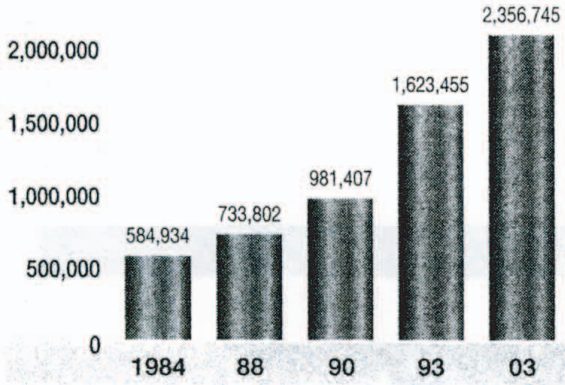
(Unit: persons　単位: 人)

	Country, region 国・地域	No. of students 学習者数
1	China	73,081
2	South Korea	15,782
3	U.S.A.	5,518
4	Brazil	3,779
5	Taiwan	3,673
6	Thailand	3,244
	Others	30,069
	Total	135,146

日本語を学ぶ外国人数（海外）

(Unit: persons　単位: 人)

No. of Foreigners Studying Japanese (Abroad)



★Ministry of Foreign Affairs　外務省「外交青書」

4.「学力低下」

2000年と2003年の「読解力」「数学的リテラシー」のランキング
Rankings in "Reading" and "Mathematical Literacy" for 2000 and 2003

(Unit: point 単位:点)

国際学習到達度調査における平均得点の比較（2003年）
Comparison of Average Scores in International Student Assessment Tests (2003)

〈数学的リテラシー〉Mathematical Literacy				〈読解力〉Reading		
1	香港	Hong Kong	550	1	フィンランド	Finland	543
2	フィンランド	Finland	544	2	韓国	South Korea	534
3	韓国	South Korea	542	3	カナダ	Canada	528
4	オランダ	Netherlands	538	4	オーストラリア	Australia	525
5	リヒテンシュタイン	Liechtenstein	536	4=	リヒテンシシュタイン	Liechtenstein	525
6	日本	Japan	534	6	ニュージーランド	New Zealand	522
7	カナダ	Canada	532	7	アイルランド	Ireland	515
8	ベルギー	Belgium	529	8	スウェーデン	Sweden	514
9	マカオ	Macao	527	9	オランダ	Netherlands	513
10	スイス	Switzerland	527	10	香港	Hong Kong	510
11	オーストラリア	Australia	524	11	ベルギー	Belgium	507
12	ニュージーランド	New Zealand	523	12	ノルウェー	Norway	500
13	チェコ	Czech	516	13	スイス	Switzerland	499
14	アイスランド	Iceland	515	14	日本	Japan	498
15	デンマーク	Denmark	514	15	マカオ	Macao	498

読解力の順位（2000年）
Ranking in Reading (2000)

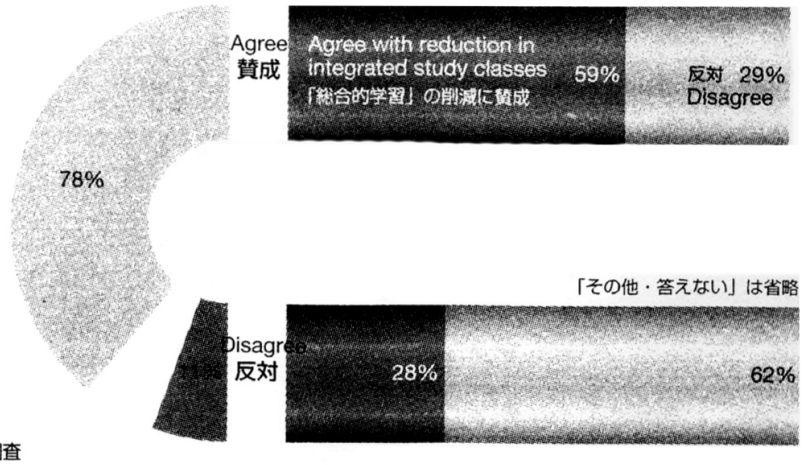
〈読解力〉Reading						
1	フィンランド	Finland	546	10=	ベルギー	Belgium	507
2	カナダ	Canada	534	10=	アイスランド	Iceland	507
3	ニュージーランド	New Zealand	529	13	ノルウェー	Norway	505
4	オーストラリア	Australia	528	14	フランス	France	505
5	アイルランド	Ireland	527	15	アメリカ	U.S.A.	504
6	韓国	South Korea	525	16	デンマーク	Denmark	497
7	イギリス	U.K.	523	17	スイス	Switzerland	494
8	日本	Japan	522	18	スペイン	Spain	493
9	スウェーデン	Sweden	516	19	チェコ	Czech	492
10	オーストリア	Austria	507	20	イタリア	Italy	487

（上位20カ国の平均点）
（Average scores of the top 20 countries）

経済協力開発機構（OECD）が03年実施した国際的な学習到達度調査の結果が、世界同時に公表された。41カ国・地域の計約27万6千人の15歳が対象。日本は、前回（00年）8位だった「読解力」がOECD平均レベルの14位まで低下。「数学的リテラシー（応用力）」は前回の1位から6位になった。（04年12月7日付朝日新聞）

「ゆとり」見直し賛成78%
78% Favor a Reconsideration of "Relaxed" Education

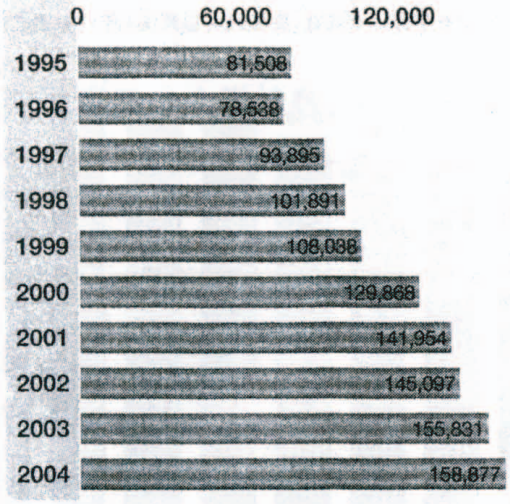
ゆとり教育見直しに…
Course for reconsidering relaxed education



★朝日新聞社　世論調査

就労目的の新規入国外国人数 (Unit: persons 単位: 人)

Foreigners Entering Japan for the First Time for the Purpose of Work



★Ministry of Justice 法務省

在留資格別の新規就労外国人数（2004年） (Unit: persons 単位: 人)

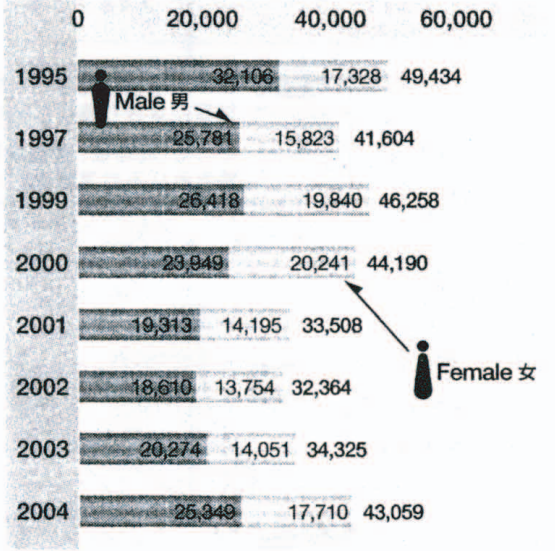
No. of New Foreign Workers by Status of Residence (2004)

Status of residence	No.	在留資格
Entertainers	134,879	興行
Specialists in humanities/ international services	6,641	人文知識・国際業務
Intra-company transferees	3,550	企業内転勤
Teachers	3,180	教育
Engineers	3,506	技術
Professors	2,339	教授
Skilled laborers	2,211	技能
Persons of religion	971	宗教
Researchers	577	研究
Investors/business managers	675	投資・経営
Others	348	その他
Total	158,877	合計

★Ministry of Justice 法務省

不法就労外国人数 (Unit: persons 単位: 人)

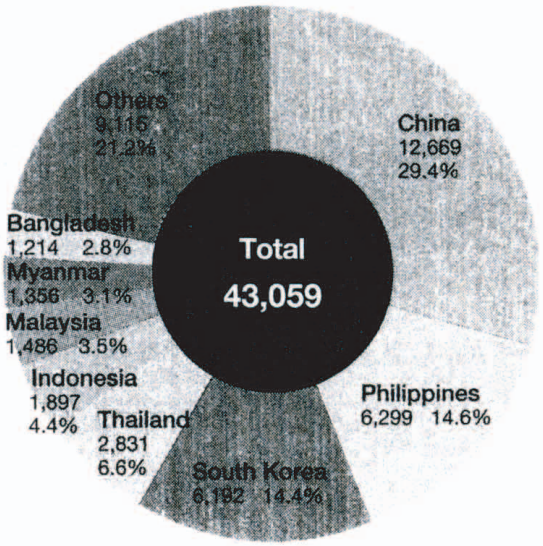
No. of Illegal Foreign Workers



★Ministry of Justice 法務省

国籍別不法就労外国人 (Unit: persons 単位: 人)

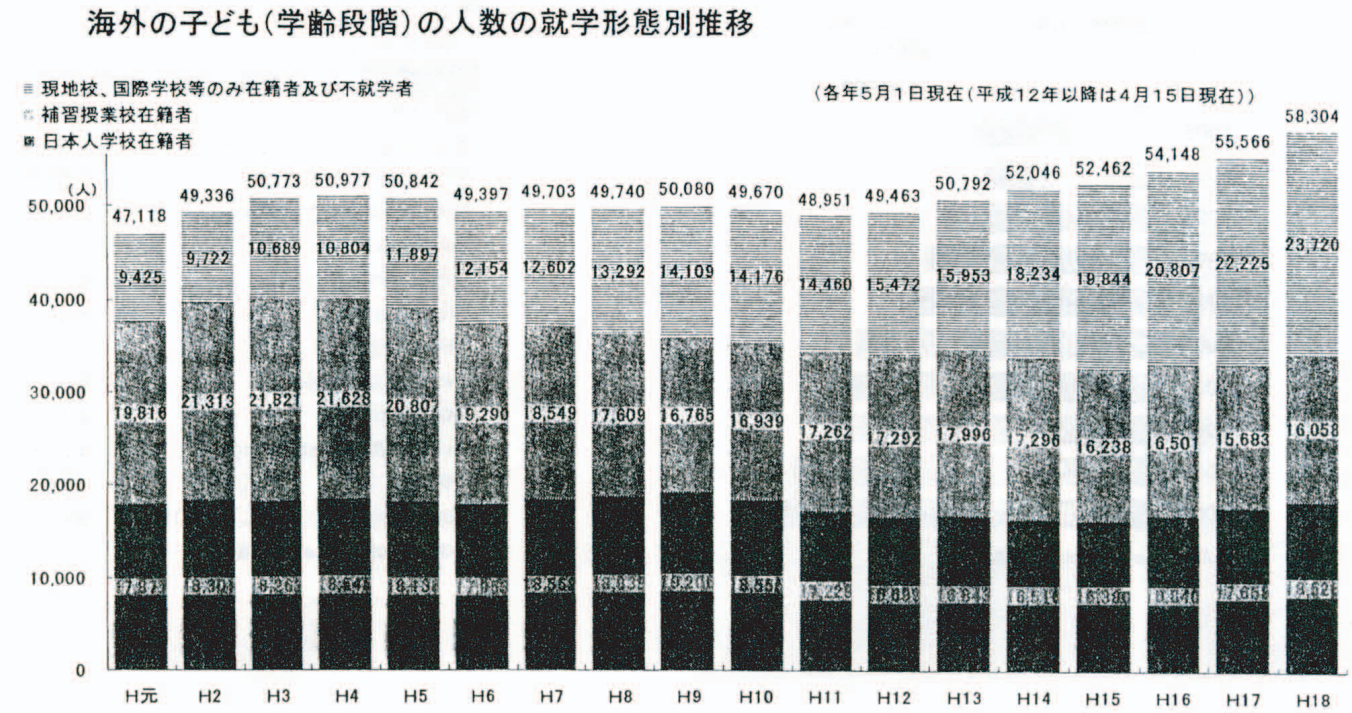
Illegal Foreign Workers by Nationality

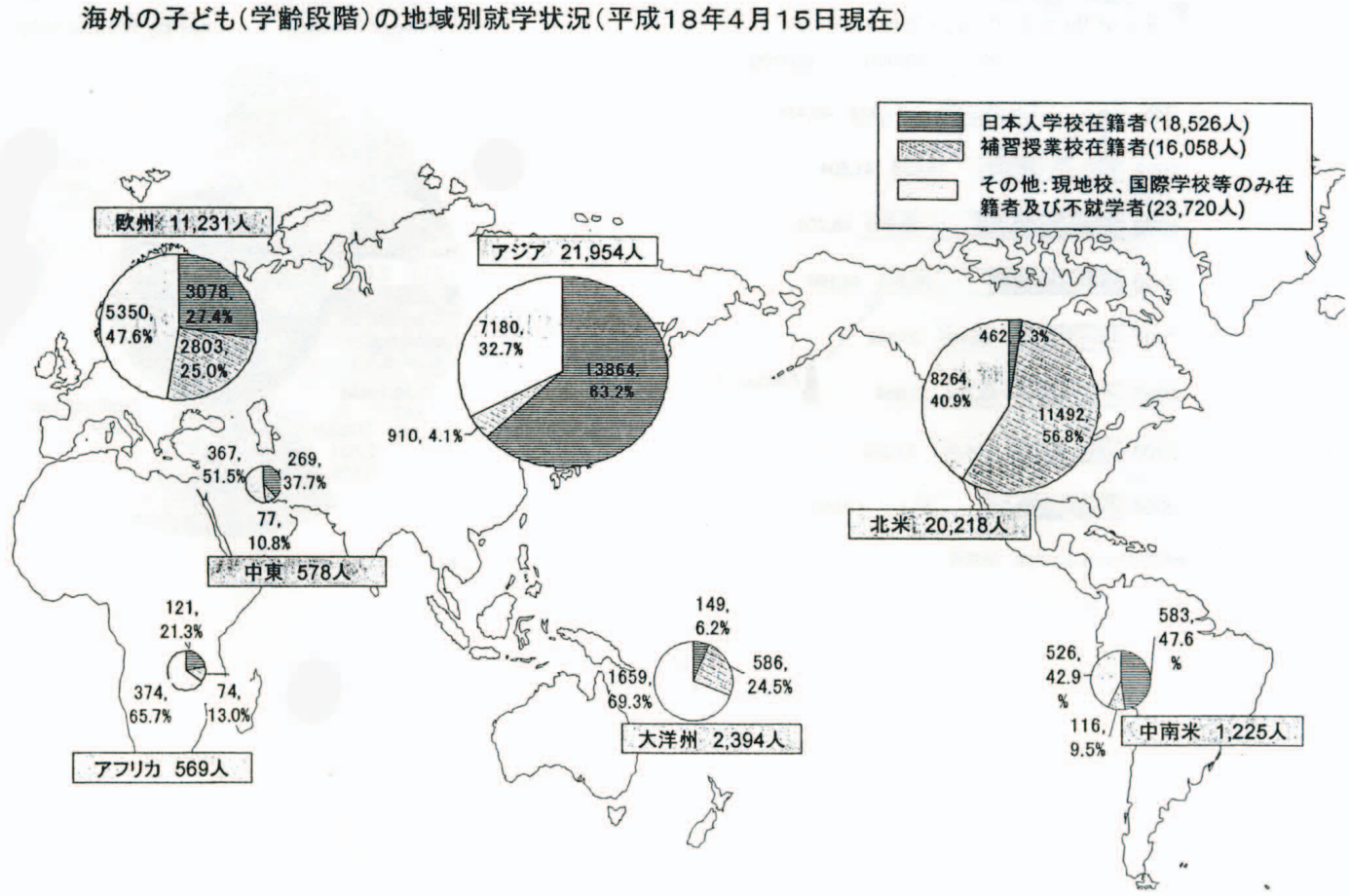


★Ministry of Justice 法務省

Ⅲ 海外児童生徒(子女)教育

児童生徒の就学状況





3.日本人学校

【参考】日本人学校数　85校

私立在外学校　9校

規模別日本人学校数（平成18年4月15日現在）

区分		日本人学校数（%）		総児童生徒数（%）		学校名（在籍者数）
		校	%	人	%	
2,000人以上		2	(2.4)	4,655	(25.1)	上海日本人学校(2,367), バンコク日本人学校(2,288)
1,000人以上		2	(2.4)	3,206	(17.3)	シンガポール日本人学校(1,658), 香港日本人学校(1,548)
500～999人		5	(5.9)	3,649	(19.7)	ジャカルタ日本人学校(862), 台北日本人学校(810), クアラルンプール日本人学校(784), 北京日本人学校(639), デュッセルドルフ(554)
	400～499人	2	(2.4)	918	(5.0)	ロンドン日本人学校(466), マニラ日本人学校(452)
	300～399人	3	(3.5)	1,022	(5.5)	ソウル日本人学校(354), ブラッセル日本人学校(348), 広州日本人学校(320)
	200～299人	4	(4.7)	950	(5.1)	アムステルダム日本人学校(268), フランクフルト日本人学校(248) 他
	100～199人	16	(18.8)	2,268	(12.2)	高雄日本人学校(199)、大連日本人学校(173) 他
小計（100～499人）		25	(29.4)	5,158	(27.8)	
	50～99人	12	(14.1)	872	(4.7)	モスクワ日本人学校(98), ニュー・デリー日本人学校(89) 他
	40～49人	8	(9.4)	367	(2.0)	コロンボ日本人学校(49), ロッテルダム日本人学校(49) 他
	30～39人	5	(5.9)	179	(1.0)	メルボルン日本人学校(39), アブダビ日本人学校(37) 他
	20～29人	10	(11.8)	229	(1.2)	サン・ホセ日本人学校(25),マドリッド日本人学校(24),ワルシャワ日本人学校(24) 他
	10～19人	13	(15.3)	187	(1.0)	コタキナバル日本人人学校(19), リオ・デ・ジャネイロ日本人学校(19) 他
	10人未満	3	(3.5)	24	(0.1)	アテネ日本人学校(9),マナウス日本人学校(8),パース日本人学校(7)
小計（100人未満）		51	(60.0)	1,858	(10.0)	
（再掲）小計（50人未満）		39	(45.9)	986	(5.3)	
合計		85	(100.0)	18,526	(100.0)	

（外務省「管内在留邦人子女数調査」から文部科学省が作成）

3.補習授業校

【参考】補習授業校数　187校

【備考】□継承日本語

区分	補習授業校数(%)		総児童生徒数(%)		学校名
	校	(%)	人	(%)	
1,200～1,999人	1	(0.5)	1,208	(7.5)	ロス・アンジェルス補習校(1,208)
800～1,199人	2	(1.1)	1,920	(12.0)	サン・フランシスコ補習校(1,115), デトロイト補習校(806)
400～799人	6	(3.2)	3,131	(19.5)	ロンドン補習校(787), ニュー・ヨーク補習校(564), シカゴ補習校(492), コロンバス(OH)補習校(474), ボストン補習校(409), シアトル補習校(405)
100～399人	27	(14.4)	5,315	(33.1)	サンディエゴ補習校(395), ニュージャージー補習校(368), ワシントン補習校(347), トロント補習校(333) 他
50～99人	30	(16.1)	2,043	(12.7)	フィラデルフィア補習校(99), プリンストン補習校(93), シラチャ・パタヤ(93) 他
50人未満	121	(64.7)	2,441	(15.2)	ハンブルグ補習校(49), エルパソ補習校(47) 他
合計	187	(100.0)	16,058	(100.0)	

（外務省「管内在留邦人子女数調査」から文部科学省が作成）

【補習授業校】

（平成１６年４，

地域	学校数	児童生徒数（人）				受入れ状態（人）				所在地（例）
		小学部	中学部	高等部	合計	混合	取出	国際	他	
アジア	4校	17 (5)	5	0	22 (5)	21	0	0	1	バリ、プノンペン等
北米	40校	263 (46)	93 (24)	25 (8)	381 (78)	不　明				ロス・アンジェルス、オーランド等
中南米	1校	6(6)	1(1)	0	7(7)	7	0	0	0	グアダラハラ
欧州	23校	36 (13)	15 (3)	13 (2)	64 (18)	48	1	18	0	ジュネーブ、ベルリン等
大洋州	4校	13 (3)	6 (2)	2	21 (5)	21	0	0	0	メルボルン、アデレード等
中近東	1校	0	0	0	0	0	0	0	1	クェイト
アフリカ	0校	0	0	0	0	0	0	0	0	－
計	73校	335 (73)	120(30)	40 (10)	499 (114)	－	－	－	－	－

（注）
- 現地法制上、外国人の子どもの入学を認めていない国がある。（インド、イラン等）
- （　）内は、外国人児童生徒数のうち所在国以外の国籍を有する児童生徒の数
- 受入れ状態の区分は以下のとおり
  - 「混合」：日本人の児童生徒と同じ学級編成
  - 「取出」：特定教科についてのみ特別の学級編成（取出し授業）
  - 「国際」：外国人児童生徒のみの学級編成（国際学級）
    - →日本人学校ではシドニー日本人学校のみ、補習授業校ではトゥレーヌ（仏）、オマハ（米）、エルパソ（米）等が設置。
- 補習授業校については、調査に対して回答のあった学校のみを集計（186校のうち167校が回答）。
- 幼稚部あるいは日本語学級で受け入れているケースがある。

4.国際結婚児童生徒

①国際結婚による児童生徒数

国際結婚による児童生徒数が100人以上の日本人学校(H16年度)

学校名	在籍者	国際結婚	同比率	日本語指導	同比率
台北	814	257	31.6%	15	1.8%
バンコク	2,074	240	11.6%	37	1.8%
上海	1,650	138	8.4%	0	0%
ソウル	323	125	38.7%	14	4.3%
北京	459	123	26.8%	4	0.9%
ジャカルタ	845	112	13.3%	13	1.5%
ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	1,730	100	5.8%	13	0.8%
全学校	16,889	1,996	11.8%	217	1.3%

○　近年、アジア地域において国際結婚による児童生徒が増加

5.海外勤務者在留期間

②海外勤務者の赴任期間

赴任期間	1982年	1999年
短期(3年以下)	35%	12%
中期(3年超7年以下)	57%	59%
長期(7年超)	8%	29%

○　平成15年10月現在、長期滞在者数(海外に一年以上滞在)は約62万人で対前年度5%増。

○　7年超の赴任が大幅に増え、約3割を占める。

Ⅳ バイリンガル教育

1 .小学校の英語教育

【備考】□首都圏を中心としてのインターナショナルスクールの急増

□インターネットでの「小学生の英語教育」登録　約２,７００,０００件

2 .帰国児童生徒

【備考】□“ 隠れ帰国子女 ”

3 .【参考】

「母語・継承語・バイリンガル教育研究会」　２００３年５月　桜美林大学

[研究対象領域]

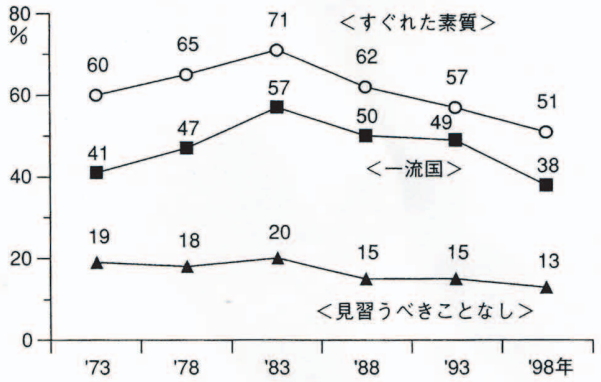
○先住、定住、新来児童生徒の母語・継承語教育

○日本人・日系児童生徒の継承語としての日本語教育

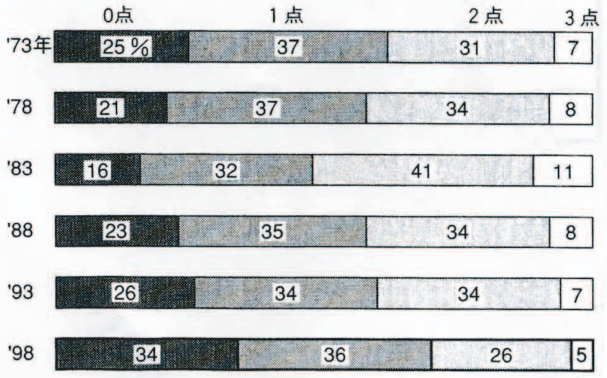
○聾児のためのバイリンガル教育―母語を手話とする人たちのための日本語教育―

○海外・帰国子女・国際学校子女・その他各種イマージョン教育

【補遺】



自国に対する自信（国民全体）



自国に対する自信スコア（国民全体）

韓国における帰国子女適応教育

朴　且煥
［ソウル日本語教育研究会］

1.帰国子女の増加：経済成長と国際化による人的・物的交流の活発

1)海外へ行く子女

2000年：4,397名、2003年：10,498名

2)帰国子女

2000年：約9,000名、2003年：12,314名

その内、5.8%だけが小・中・高の17校の特別クラスで国内適応教育プログラムを受けている。（教育人的資源部、2004年より）

2.帰国子女教育の経過

1) 1992年：ソウル大学校師範大学併設小学校の帰国子女クラス開設

2) 1997年9月：小学校５校（ソウル３校、京畿道１校、大田１校）

3) 1998年3月：小学校３校増加（京畿道１校、釜山１校、全羅道１校）

4) 1999年２月：初・中等教育法施行令第19条、第75条、第92条によって帰国子女特別クラスへの編入が可能

5) 2000年：帰国子女特別クラスモデル運営（中5校、小14校）

2003年：小2校増加

3.帰国子女適応教育の実態

1)最初のプログラム：国際教育振興院（1989年）

「帰国子女特別適応教育課程」として‘海外帰国学生キャンプ’実施（毎年冬・夏休み）

主なプログラム→チーム別プロジェクト、クラス別プロジェクト、世界文化体験、韓国文化体験

限界：受容人数が少ない、短い期間（4～5週）、参加対象（小４～６年）

2)帰国子女特別クラスモデル学校現況（図1）

3)教材及び適応プログラムの開発：学校自体開発

4)帰国子女教育の実践事例（尹裕淑氏、井嶋氏の論考「韓国の海外帰国子女教育の過去・現在そして今後に向けて」により）（別添）

4.帰国子女特別クラスの運営事例から現れた問題点

1)政府からの教育支援の不足

2)帰国子女特別クラス設置の偏重（首都圏、小学校）

3)専門教員の養成

4)多様な教育課程やレベル別教材開発

5.課題

1)帰国子女特別クラスの増設及び適応教育専用学校の設立

2)帰国子女のための別の教育課程の編成

3)帰国子女のための別の言語学習教材及び指導要領の開発

4)バイリンガル教師の養成

5)国際理解教育プログラムの開発

図 1)帰国子女特別クラスモデル学校の現況（教育人的資源部、2002年より）

地域	学校名	設置現況			
		運営方法	クラス数	生徒数	設置年度
ソウル	ソウル師大併設小学校	学年別	6	39	1992
	ソウル教大附属小	4、5、6年	3	30	1997
	シンチョン小	1、2／3、4／5、6	3	21	1998
	モクウォン小	1、2、3／4、5、6	2	22	2000
	タンヒョン小	無学年	1	8	2002
	オンジュ中	学年別	2	14	2002
	トクス中	無学年	1	10	1998
京畿道	クンゲ小	無学年	2	31	1998
	ホウォン小	無学年	1	16	1998
	サンド小	無学年	2	25	1997
	ネジョン中	学年別	3	120	2000
仁川	ヒョソンドン小	無学年	1	10	2000
釜山	クァンナム小	低／中／高	1	47	1998
	クンヤン小	無学年	3	7	2000
大田	テドク小	1、2、3／4、5、6	2	39	1998
	大田チョンミン 小	学年別	2	29	2000
	テドク中	無学年	1	14	1998
計	19校		36	477	

（別添）

□ソウル師範大学附属小学校の実践事例

在籍児童の在留国、在留期間、帯同背景、保護者の職業の一覧を掲げる。（2004.ソウル師範大学付属小学校の＜学校教育計画書＞より）

在留国別の児童数

学年	米国	カナダ	日本	英国	台湾	オーストラリア	ウクライナ	タイ	インドネシア	ベトナム	ドイツ	香港	イタリア	計
1	7	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	9
2	7	1	—	—	—	1	—	1	1	—	—	—	—	11
3	3	—	—	1	1	2	—	—	—	—	—	—	—	7
4	3	1	—	—	1	—	1	—	—	1	—	—	1	8
5	2	1	—	1	—	—	1	—	1	1	—	—	—	7
6	4	2	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	8
計	26	6	1	2	2	3	2	1	2	2	0	1	1	50

在留期間別の児童数

学年	2— 3年未満	3— 4年未満	4— 5年未満	5— 6年未満	6— 7年未満	7— 8年未満	8— 9年未満	9年以上	計
1	1	2	1	1	4	—	—	—	9
2	3	—	—	1	2	3	—	1	11
3	1	—	1	1	1	—	3	—	7
4	3	—	1	2	—	1	1	—	8
5	—	—	1	2	1	—	—	3	7
6	1	—	1	—	2	1	—	2	7
計	9	2	5	7	10	5	4	6	49

在留（帰国）背景と児童数

学年	会社の海外勤務	公務員の海外勤務	留学	特派記者	個人事業	永住市民権者	親戚の家	計
1	1	—	7	—	—	1	—	9
2	2	—	6	—	1	1	1	11
3	4	1	2	—	1	—	—	7
4	3	—	4	—	1	—	—	8
5	3	—	3	—	1	—	—	7
6	1	1	3	—	2	1	—	8
計	14	2	25	0	6	3	1	50

保護者の職業と児童数

学年	会社員	公務員	銀行員	大学教員	弁護士	留学生	語学講師	牧師	旅行社	画家	事業	映画評論	翻訳家	博士
1	4	—	—	3	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
2	2	1	—	5	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—
3	4	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4	3	—	—	2	—	—	1	—	—	—	1	1	1	—
5	3	—	—	2	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—
6	1	1	—	2	—	1	—	1	—	—	2	—	—	—
計	17	3	0	16	0	1	1	2	0	0	8	1	1	1

教育課程の方針、実践内容

①運営のための組織

"帰特クラス"運営委員会の組織及び運営

※"帰特クラス"運営委員会：一般的にきょうちょう、教頭、帰特クラスの担任教師、PTAの代表、教務部長教師になっている）

②プログラムと内容

A，生活・文化の適応のためのプログラム

○学校、地域での基本的生活の指導例。先・後輩との関係、部活のこと

○保護者対象の研修会の開催例。学期の初めに学校の運営についての説明会　等

○体験学習を含めた韓国の歴史と文化の学習例。有名な文化財のある地域を訪問して直接見て説明を聞く

○民族伝統文化の体験学習例：民俗遊びの体験

B，国語教育の補習、強化プログラム

この母語教育指導については、以下の過程を経て行っている。

1、プレースメントテスト　2、習熟度クラス編成　3、習熟度及び個別学習

＊日本では"国語教育"と"日本語教育"をはっきり区別して教育を行っているが、韓国では韓国語がまだ十分できない学生でも"国語教育"のかたちで教育している。中でも読解を中心にさせている傾向が多い。

C，共通社会プログラム

＊韓国は"共通社会"といって、すなわち地理、国史、一般社会、世界史の領域を統合して教えている。その領域ごとに各国の社会的文化の部分を取り上げて教えるのである。

D，計算力を中心とした基礎的算数力の補習プログラム

E，外国語の能力の維持及び伸張プログラム

○低、中、高学年別にしての週３時間の、母語話者（native speaker）による特別指導

現在は、英語のみで実施。

＊生徒、保護者からの"外国語の維持のための願い"は勿論大きいだろうが、英語圏以外の国から帰国した学生の数がほぼ３人以下なので、予算上国別のクラスの運営はできない。

F ,一般クラスとの連係プログラム

○合同授業の実施（一部の教科を対象に一般クラスと交換授業）

＊数学か科学が代表的であって、図式、実験などの比重がかなり多いので、授業するにおいて言葉がそんなに必要ではない場合だといえる。

○特別活動への参加（学年別）

＊韓国では部活のことを“特別活動”と呼ぶ。機能、役割もまったく同じ。

○体験学習への参加（学年別）

＊有名な文化財のある地域を訪問し、見て説明を聞くといった形の体験学習

○外国語スピーチ大会の実施（一般部と帰国部に分けて実施）

＊英語だけではなく応募したら何語でも参加できる。

○外国語の日記大会の実施（一般部と帰国部に分けて実施）

＊上記と同じく、何語でも関係ない。ただ、こう二つに分けて実施するのは、帰国学生と一般学生の差がとても大きいので、最初から分けて大会を実施するのである。

G ,「国際理解教育の日」の行事の実施

○帰国生徒の現地体験を活かし、学年別による“様々な国の文化紹介”と展示等による一般生徒の文化体験

「越境した教師が出会う職業高校という環境」

工藤節子
［東海大学（台湾）］
武藤泰子
［環球技術学院（台湾）］

キーワード
越境、教師、職業高校、教育環境

１．はじめに

台湾では教育改革により2001年より英語開始時期を小学校五年生に決め※1、中等教育※2、高等教育においても英語力強化が叫ばれる※3など、学校教育における英語の地位はますますゆらぎないものになっている。グローバル化のためには国際競争力をつける必要があり、そのために英語を強化する必要があるというのである。

経済交流や観光で日本と密接な関係にある台湾で、次に重要視される外国語が日本語である※4。日本語は英語に次ぐグローバル言語※5として位置づけられ、現在台湾の大学では145の機関で日本語教育が行われ※6、中等教育においても第二外国語としての標準カリキュラムが出された1995年以降、日本語教育をスタートさせる高校が増え、現在175の機関で日本語教育が実施されている※7。

一方、外国語教育において会話や作文といった科目はネイティブの教師が担当することが多く、大学や高校でも外国籍の教師が採用されている※8。しかし、筆者らを含め外国籍の教師が自国とは異なる教育環境で外国語を教える際にはさまざまな驚きや戸惑いを感じることが少なくない。

教師の仕事は、学生と教師間のやりとりにフォーカスされることが多いが、実際に教師の関わる仕事は学生との関係だけに留まらず、学校側の考えを含む学校文化、またそれをとりまく社会文化にも大きく影響を受けている。例えば、外国籍として雇われた教師たちには、ネイティブ性を求められると同時に、越境した先の文化を理解することも求められる。

外国人として学校で日本語を教える教師の日常、また教師としてのアイデンティティ※9はいかなるものか、また教師をとりまく環境はどのようなものか。そこで台湾の職業高校で日本語を教える日本人教師を対象にインタビューをし、仕事内容や教師としての悩みを聞くことにした。このうち本稿でとりあげるのは、その教師をとりまく教育環境についてである。学校教育の中で職業高校を選んだのは、筆者らに職業高校で教える教師仲間の悩みを聞く機会があったこと、普通高校より日本語教育にかける時間数が多いにもかかわらず普通高校や大学ほど教師の抱える問題が知られていないためである※10。台湾では職業高校は普通高校と比べ「二流」の学校と位置づけられ、私立では生徒の確保に困難をきたしている学校もある。中等教育の教育改革が進められている中で※11、特に厳しい状況にある私立の職業高校は今生き残りをかけた状態とも言える。

※1 地域や各学校の実情に合わせ、小学校1年から実施している学校もある。

※2 中等教育の第二外国語として日本語教育が90年代後半からスタートする学校も増えたが、台中市のある普通高校では、英語教育を強化するという目的で、2006年に日本語教育をやめた。

※3 台北のある大学では2007年度入学の全学生の卒業の要件として検定試験で一定の成績（例：TOEFLで500点以上、TOEICで600点以上等）をとることを決めた。また中部にある技術学院の企業管理学科では、これまで第二外国語としてあった３コマの日本語の授業を2009年より廃止し、英語の検定試験対策のクラスに切り替えることを決めたと言う。

※4 日本語学習者数は世界で5番目に多く、日本語の普及状況を示すとも言われる日本語能力試験受験者数は、中国、韓国についで世界で3番目に多い。（「いろは」22号）

※5 春原（2007）は、現実には言語に政治、経済、文化的資源として序列があり、1番目が英語、2番目にフランス語やスペイン語、中国語などがあり、日本語はフランス語などと同様2番目に位置づけられると述べている。

※6 交流協会（2004）「平成15年度日本語教育事情調査」

※7 機関数は、交流協会（2004）「平成15年度日本語教育事情調査」による。この他、最近の中等教育における日本語教育の傾向としては、注３で述べたように英語強化のために減らされる日本語クラスがある一方で、中学や高校で英語の成績のいい学生だけを集めた日本語特別クラスの授業開始が目立ってきた。

※8 日本籍の教師の割合は、塾で41.6%、中等教育で12.6%、高等教育で16.9%（交流協会2004）。

※9 ここで言うアイデンティティとは教師としての職業的自己同一性のことであり、自分にとって何をすることが教師としての仕事なのかという認識のことである。

※10 普通高校の日本語の授業は、第二外国語としての位置づけで一週間に2コマ程度が多いのに対して、職業高校では応用外国語学科の専門科目となるため日本語に関連する科目が多く、1年生で16コマある学校もある。

※11 教育部のいう「推動十二年国民基本教育」は、現在の九年の義務教育を高校も含む十二年に延ばそうというものである。その計画の中で、高校教育の質の向上を目指すとともに、質の悪い高校は淘汰され、高校間格差をなくすことがあげられている。

2.職業高校について

2－1　教育制度の概要

台湾の教育制度は、日本と同様に6-3-3制であり、小学校、中学校が義務教育である。高校は、普通高校の「高中」、職業高校の「高職」、及び、民国85年（1996年）から実施された職業高校が普通高校の性格を持つ「総合高中」がある。高等教育では、教育部（文部省）の「高等教育司」が管轄する普通大学と、「技術及職業教育司」の技術学院・科技大学に分かれている。基本的に、後期中等教育で、「高中」に進んだ学生は普通大学へ進学し、「高職」に進んだ学生は技術学院・科技大学へ進学する。

<table>
<tr><td rowspan="4">学校形態</td><td colspan="4">高職（188校）</td><td colspan="4">高中（277校）</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td colspan="4">総合高中（124校）</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td colspan="3">部分実施（114校）</td><td>全分実施</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>純高職
90%</td><td>高職付設普通科
10%</td><td>高職
37%</td><td>高職付設普通科
10%</td><td>高中
12%</td><td>高中付設高職
33%</td><td>10校
33%</td><td>純高中
12%</td><td>高中付設高職
33%</td></tr>
</table>

図　後期中等教育

2－2　大学入学試験

普通大学へ進学するためには、「大学学科能力測験」を受験するが、技術学院・科技大学への進学には「四技二専統一測験」を受験する必要がある。普通大学の試験には日本語の科目がない。科技大学用の試験は、一般科目と専門科目に分かれ、専門科目に日本語がある。科技大学は、各学科ごとに、統一測験の専門科目を指定している。（専門科目は複数指定可）日本語の専門科目試験を受験すれば、日本語の専門科目を指定している学科に応募することができる。

2－3　職業高校のカリキュラム

高職のカリキュラムは、その専攻ごとに「職業學校課程綱要」に定められている。日本語専攻をもつ高職は「外語群科」のカリキュラムに従う。95年に施行された外語学群科の「職業學校課程綱要」では、その教育目標を以下のように定めている。

1.外語群に関連する専門領域の能力を高め、さらに知識を深めるための基礎を養う。

2.外国語に関連する各産業領域の外国語の仕事を担当する初級の人員を育成する。

まとめると、1専門能力の基礎知識・技能の育成、2社会の専門領域で貢献できる初級人材の育成、である。また、育成する専門能力は、「1外国語の基礎能力、2事務処理能力、3応対能力、4口頭表現能力」としている。

カリキュラムは、教育部が定める必修科目として、一般科目が72から80単位、専門科目が「日語聴講練習」（聞く／話す）「日文閲讀與習作」（読む／書く）が各8単位、それ以外に各学校が96から104単位を定めることができる。授業は50分が1時限、18週（1学期）で、1単位が原則である。

3.インタビュー

本研究ではライフストーリー・インタビューという手法を用いて教師の語りを分析する。ライフストーリー・インタビューは社会学や人類学、教育学で用いられる質的面接法の一つで、徳田（2004）によれば、個人の主観的な観点から経験の意味づけや人生の様相をとらえるのに適しており、聞き手と語り手の相互作用を基盤に語り手側に新たな自己理解や経験への意味づけがなされることがあるという。インタビューは、2007年6月中旬に一人につき1時間から2時間かけて3人の教師※10行い、文字化をした。3人（A，B，C、いずれも女性）はいずれも都市部の私立の職業高校、応用日本語学科で日本語を教えているという共通点があり、B，Cは非常勤、Aは専任、またA，Cは日本人が職場で1人、Bは他にも日本人教師がいる。

※12 うち現役は２人、１人は既に職を離れている。

３－１　学校における日本語の位置づけ

学校における日本語の位置づけは、学校長や言語教育担当の主任の話も聞かないと明確にはわからないが、教師の目に映った学校の姿勢としては、A , Cの学校とも日本語が重視されていたらしい。Aの学校では他学科の学生の第二外国語も日本語が必修であり、学校全体として日本語で特色を出していこうという考えがあったと言う。また、Cの学校は応用外国語学科であっても英語学科など他の言語の学科はなく日本語学科のみである。Bは学校経営者が日本語が流暢で、何かと日本びいきであることを報告している。ただし、この学校は日本語と英語、両言語で特色をだしていこうとしている印象をBに与えている。

３－２　教師の日常

担当科目は作文と会話が 3人共通して出てくる。授業では教室でのアクティビティをしたり、学生を注意したり、授業外でも、課題をチェックしたり、授業に関わる仕事がある。一クラスの人数はAの学校が３５人[※13]、Bは小クラス制で２０人以下[※14]、Cは６０人と、カリキュラムの編成によって多様である。３人ともテストや授業進度のために同僚と相談することがある。この他スピーチコンテストや劇、作文コンテストがあれば、生徒の原稿を添削するのは日本人教師の仕事であり、これ以外にAは日本の関係校との交流の連絡、Cは挨拶原稿やホームページ原稿のネイティブ・チェックの仕事を手伝うこともあった。

３－３　日本人性

Aは中国語ができることが採用条件だったが、B , Cは「日本人であればとにかく誰でもいい」と学校の姿勢を感じている。「日本人であれば誰でもいい」というのは「特に自分でなくても日本人ならば…」という気持ちにつながると考えられるが、Bの場合は、同僚教師から生徒とのコミュニケーションがうまくいっていると評価されていることで、「自分がその場にいる意味」を見出している。他方、Cは自分が名前ではなく「日本人教師」と呼ばれていることからも「自分」を見出しにくい状況にあると考えられる。また、「中国語を使うのならなぜ日本人教師なのか」ということから「日本人教師」自体の疑問も出される。またBは管理職の教師に「生徒の日本語会話が下手なのは日本人教師の責任」にいう言い方をされることもあり、会話や聴解技能の向上が日本人教師に期待されていると認識している。

３－４　中国語の必要性

３人とも中国語の使用なしで授業はやっていけないと感じている。Aは中国語に関しては悩みではなくむしろ仕事への動機付けになっている部分があるが、中国語が採用条件ではなかった他の 2校の教師は、中国語と日本語のバランスをどうしたらいいか、中国語を使うのならなぜ日本人教師なのか、という中国語に関することが悩みとして捉えられている。

３－５　語学学校との違い

３人とも以前に台湾の語学学校で日本語を教えた経験を持つが、いずれの教師も語学学校での仕事と職業高校での仕事に違いを感じ、A , Cは「全く違う仕事」と捉えている。「（語学学校では）生徒とは深く関わらない」「（学生が）いやだったらやめればいい塾（語学学校）、学校の場合は（生徒が）いやでもやらせないといけない」「（学校は）生徒の反応があって面白い」等、いずれもその違いの多くを生徒との関わり方の違いに感じている。

※13 初年度は６０名だったという。

※14 Bは同じ学校の中学部でも日本語を教えているが、そのクラスは一クラス４０名だという。

３－６　生徒に関わる視点

学習意欲がある生徒がいる一方で、学習意欲のない生徒もいる。それぞれの学校の中には「英語ができないから日本語に来た」という日本語学習に対する動機が低い生徒たちも多く、「日本語が必修科目」という、日本語を教える／学習することが所与の条件である学校の授業で生徒にどう対処していくかが、３人の教師に共通する問題としてあげられている。また、遅刻、授業中トイレにたつ、居眠りをする、等の行為は日常茶飯事であり、日本語を教える以前に生徒指導が求められる学校の中で、３人の教師が共に、「自分に生徒管理の仕事は要求されない」が、担任や生徒管理を求められる台湾籍の専任教師の仕事は「もっと大変だろう」と語った。

４.おわりに

中等教育で日本語を教える越境した教師の日常と問題についてインタビューした中の、本稿でとりあげたのは教師を取り巻く教育環境である。そこには生徒との対応はもちろん、学校が期待する仕事、日本人教師にとっては外国語である中国語の使用をどうするかも含め教師が日々行う仕事がある。台湾における学校制度の中の職業高校がもつ学校文化には共通する部分も見られるが、３人の経験とそこから派生する認識は同じではなく、それぞれの学校の教育理念、同僚教師の日本語教育に対する認識、生徒から見る日本語を学ぶ学校という環境に関しては、今回のインタビューでは明らかにされておらず、これは今後インタビューを続ける中で明らかにしていかなればならない。とりわけ、自分のいる学校をどう捉えているか（職業学校という台湾社会での位置）や、周りの同僚について（担任の仕事は大変、もう一つの外国語である英語の教師のこと）等、自分の置かれている社会をどう捉えているかは、自己のアイデンティティと関わりを持つため重要と考える。

《参考文献》

財団法人交流協会日本語センター（2006）「いろは」２２号
（2004）「平成 15年台湾における日本語教育事情調査」
桜井厚・小林多寿子（2005）『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房
張金塗（2001）「高中日語師資培育之探討」『東呉日語教育学報』２４
陳淑娟（2001）『台湾の普通高校における日本語教育研究―フィールドワークを通じてー』致良出版社
徳田治子（2004）「ライフストーリー・インタビュー」『質的心理学』新曜社
林明煌（2005）「台湾の中等教育における日本語カリキュラム開発の基準と問題」
『興国管理学院応用日語学報』第１期（創刊号）
春原憲一郎（2007）「グローバル言語の教育という営為」『台湾、韓国、沖縄で日本語は何をしたのか』三元社
教育部（2004）「職業學校外語群科課程暫行綱要 _設備標準」
教育部技術及職業教育司（2006）「技術及職業教育簡介」
劉澤宏・楊豪森（2003）「高職轉型綜合高中現況與困難問題之探討」『技術及職業教育』第 76期
教育部技術及職業教育司

香港の教育改革における言語教育政策と多言語社会の行方

マギー梁　安玉
香港日本語教育研究会副会長
香港大学　現代語言及文化学院
2007年8月5日

1　香港における「母語」と学習・教学言語

- **1997**年以前
- **1997**年以後

香港における「母語」の定義

- Some feel that being part of China, the "mother tongue" of people in Hong Kong should be Putonghau. However, we define the "mother tongue" in the present context as the medium through which teachers and students can freely and effectively communicate their views in their daily life. For the majority of people in Hong Kong, they speak and communicate most effectively in the Cantonese dialect, while the official Chinese is used as a written tool.
  - **Education Commission 2005**年報告書

2　1997年以後の言語教育政策

- 二文三語
  (bi-literacy and trilingualism)
- 書き言葉：　英文、
  中文
- 話し言葉：　広東語（香港の共通語）
  中国語（北京語）
  英語

3　1998年：MOI POLICY
教学媒介言語政策

- 1978年　9年間の義務教育の実施
- 1982年　*A Perspective On Education In Hong Kong*

"language of the heart"
教育審議会の提案：中国語を教学媒介言語として中等教育での実施

3　1998年：MOI POLICY
教学媒介言語政策

- 1986年　教学媒介言語政策：学校に決定権を与えている
- 1997年　*Guidance*　：　MOI　POLICY
  教学媒介言語政策要領

1998/99年度から実行：

- 中一から全部の科目は原則として、「母語」で教える
- 英語を教学媒介言語として使う学校は次の 3 つの条件を満たす必要がある：学生の能力、教師の能力、必要な設備等
- 結果：112 EMI 学校　　300 CMI 学校

4.「英語迷信「英語神話」

- 言語教育対策　と　教育媒介言語政策に対する見方におけるさまざまな落差

4. 「英語迷信「英語神話」

- 政府　母語教育の原理
- 学校側　学生の英語の水準
- 企業　英語力よりも、仕事に対する態度、対人関係
- 父兄　英語の重要性、将来の仕事のため
- 学生　英語が難しい

Education Commission (2005) Report:

- **We would like to stress that the mother tongue is the most effective MOI for students, the direction of the MOI policy should be "to uphold mother-tongue teaching and enhance English proficiency concurrently.**

5　2006～2012年：香港の教育制度の抜本的な改革

- 2006年まで：6－5－2－3
- 2006年以後：6－3－3－4　日本、中国、アメリカと同じ
- 2012年に新しい学制の高校生が四年制の大学の一期生として入学

NSS　新しい高校の学習内容

- 1　必修科目：中国語、英語、数学、一般教養科目
- 2　2～3選択科目
- 3　第三言語（選択）

教育目標：

- **"student-focused, aims to develop each student in an all-round manner so that he/she is capable of life-long learning, critical and exploratory thinking, of being innovative and adaptable to changes."**

教育目標:

- **"require students to possess broad and extensive knowledge, ...developing their generic skills and positive attitude"**
- **"the 'For All Students' education belief, all students possess the abilities to learn though they differ in intelligence."**

言語能力の訓練が重要視されている：

- **"aim to develop students' language proficiency"**
- **"good communication skills"**

教育制度改革における中国語教育の重要性

- 1997年の初代香港行政長官の最初の「政策表明」 教育の目標：
- **To help secondary school graduates to be proficient in writing English and Chinese and able to communicate confidently in Cantonese, English and Putonghua.**

2003年Standing Committee on Language Education and Research 提案：

- 小１から高校まで：２文３語
- 小１から中３まで：Central Chinese Language (Putonghau, 中国語・北京語) curriculum for all students

教育制度改革における外国語教育

- 2009年の高校一年生：フランス語、ドイツ語、HINDU、日本語、スペイン語、URDU語を選択科目をとして、勉強できる

6　まとめ：香港の言語教育政策と多言語社会の未来

- 香港：ますます　多言語社会になる
  母語、国語、公用語
- 多言語—豊かに自己表現できる
- IDENTITY CRISISの解消になる？
  言葉とアイデンティティー

参考資料：

- Education Commission, HKSAR (2005) *Report on review of Medium of Instruction for Secondary Schools and Secondary School Places Allocation.*
- Education Bureau（2005-7）*Realising the Vision of 334.*

文化と言語：「国際化の中の言語教育」

岩見武夫
［香港柔道館館長　国際武道大学（日本）講師］

高い所から失礼します。

只今ご紹介に与かりました岩見武夫と申します。

香港に長く在住しているだけが取り得の私に対し、権威ある日韓アジア教育文化センターの研究会に講師としてお招き頂きました事を、大変名誉に存ずるものであります。同時にこのような機会を与えてくださった、香港大学助教授、マギー梁先生に深く感謝申し上げます。また、愚息龍馬共々お話しをさせて頂く事を、大変恐縮に存じている次第でございます。

演題（文化と言語・国際化の中での言語教育）に関しての講演を、ということでございますが、高度で学術的な意味合いを有している本日の演題に果たして相応しく合致した内容であるか、正直心配しているところでございますが、私の母国語日本語圏以外の英語、広東語圏である香港において、長年生活をしてきた者として、その経験から演題に出来るだけ近い内容でお話を進めて行きたいと思います。

私は香港へ参りまして45年経ち、香港で生活している日本人の中ではもっとも長く居住している一人となっております。初めて来港した当時、多少なりとも英語は理解する事は出来ましたが、広東語或いは北京語という、香港で生活する上において不可欠な中国語は全く出来ませんでした。しかし新聞や政府刊行物は日本と同じ漢字で表されておりその文字の意味から何が書かれているのか70%ぐらいは理解できました。

私にとって幸せだった事は、柔道と言う日本の伝統文化を香港の青少年に教えるという機会を得て、その柔道を通じて、相互理解がなされ人間関係の構築が促進され同時に言葉が自然に身についていったのであります。香港は当時イギリスの植民地であり軍隊や警察官が柔道に関心を持っており英語と時折は身振り手振りで使ってのコミュニケーションはうまく言っていましたが中国語（広東語）を使用しなければ理解してもらえない現地の生徒に対しては日本の礼儀作法など説明してわかって貰えるにはいろいろの誤解も生じたりして中々思うようにゆかず悩んだとこまあります。

そこで漢字のわかる彼らに意味を同じくする日本語を教える事からはじめました。従って柔道を指導するときは英語、日本語、習いたての広東語の３ヶ国語が飛び交う文化交流の場になっていました。柔道を習う事によって、身体の部分の名称（手、足、頭など）、や動作（上下、左右、前後座る、立つなど）進んでは技の名前と言った柔道用語を習うことから始まって、言葉の点と線が結ばれ、一年もすると挨拶から始まって道場での必要な日本語と簡単な会話が理解されるようになったのが驚きでした。

他国の言葉を習おうとする時、例えばその国の文化、映画、芸術、スポーツなどの中に、自分が特に興味、関心を持つ分野でもっと深く知ろうとすれば、やはりその国の言葉を理解する事が肝要であります。そのためには、例えば漫画を読む能力を養う事によって、アニメがより楽しめ、段階的に雑誌や小説などの本もよめるようになり、生活習慣、様式など、理解できるようになるでしょう。理解度が益々上がるでしょう。子供のときに柔道を習った事がきっかけになり、日本に対して興味を持ち日本語を本格的に勉強し、成人して留学した学生達も少なくありません、韓国でもっとも有名な競技に胎拳道という武道がありますが、今では世界に広まって、オリンピックの正式種目にもなっているスポーツです。韓国語でテコンドーと呼ぶこのスポーツに興味を持って習う外国の人たちは、韓国の言葉に接し、韓国という国に関心を持つことに繋がるはずです。スポーツに限らず、全ての文化の交流がそれを可能にさせます。

私が始めて香港へ来た頃の様子を皆さんにお話ししてみたいと思います。1960年代の始め、香港と九龍を結ぶ交通手段はスターフェリーと二、三の、カーフェリーだけでした。台風が襲来しますと、その連絡船がストップするので、九龍あるいは香港に職場があって勤務している人たちは、台風が去るまで帰る事が出来なかったものでした。泊まる場所の無いひとは困りました。香港サイドの船着場には、人力車が客待ちしており、九龍のフェリーではベンツのタクシーが並んでいました。車の渋滞は殆んど無く、街はゆったりしていました。外国人の姿が多く、アメリカ人の観光客がたくさん町を歩いていました。時代はベトナム戦争真っ最中でした。

皆さんには、にわかに信じられないでしょうが、ニューテリトリー（新界）には中国の山脈から尾根伝いに入ってきた野性の虎が家畜を襲うという出来事がありました。夜になるとその咆哮で家畜も住民もおびえたと言います。それでイギリス軍の傭兵、グルカ兵が山を包囲して虎狩りをするということもありました。

香港にある貯水ダムだけでは、賄う水が足りなく、雨の少ない年は、水飢饉になりました。給水は一週間に二回、それも僅か数時間、人々は飲料水や生活用水が不足するのみではなく、シャワーやお風呂にさえも入れない日々が続きました。

在港十年が経ち、私は柔道の弟子であった香港の女性と結婚し、男の子を授かりました。子供の話す言語はいわゆるMother’s Tongueで、勿論広東語です。従って母親とのコミュニケーションは広東語であり、家での公用語は英語、それに父親が教える日本語が少し。我が家は英語、広東語、日本語の三ヶ国語が日常会話として飛び交っていたのであります。

子供が３歳になった頃、私の仕事の関係で一家は日本へ移りました。

息子は幼稚園で始めて同じ年頃の日本のこどもと接し、日本語での会話を通じて小学校に入学する頃には父の私と日本語だけで意志の疎通ができるようになり、その時は親として本当にうれしく思ったものでした。３年生で再び香港へ戻って香港の日本人学校へ転入する頃には、日本語も読み書きができ、学校の授業にもついていけました。家での日本語の地位は市民権を得、公平に三ヶ国語が通用していました。

日本人中学校を卒業する前に現地の、英語を主体とするチャイニーズインターナショナルハイスクールに入学、卒業してアメリカの大学に進みました。大学の寮のあるロサンゼルス近郊で 4年間を過ごし、卒業後今度は東京の学生寮に入り大学院に通いながら、日本語、英語の同時通訳の専門学校で更に勉強し、そしてその後、上海の大学で北京語を学びました。多感な青春時代を、その国の言語を使い、その国の人たちと交わり、伝統文化、生活習慣、の異なる中でその国の言語を駆使しながら生活する事により、理解を深め、そしてたくさんの友人が出来、生きた言語を吸収し、4カ国それぞれの国において、日常生活の経験を通じ相互理解を深めたことでありましょう。

当時私は友人から「息子さんは、今どうしていますか？」と聞かれることがあり、「実はコレコレ、コウユウコトで、今苦労しながら勉強しております。」と答えますと「それは息子さんにとって将来食いっぱぐれありませんよ」と言う言葉が返ってきました。目的は必ずしもそうでなくとも、結果として、他国の言葉をマスターする事は、その言語が通用する地域であれば、何処の国へ行っても生活できるいわゆる武器であるともいえます。本人にとってもそれが大きな自信になっている筈です。

「可愛いい子には旅をさせよ」と言う日本の諺がありますが、幸いにもそれが実践できた親として僭越ながらその効用を皆様に一例として披瀝させて頂きました

拙いお話しを御静聴くださり有難うございました。

発題への私の感想

言語教育に御精通、数々の論文を発表され、経験豊かな専門家でいらっしゃる諸先生方から見れば、実に稚拙な内容の話しをさせて頂きました事に、冷や汗三斗の思いでした。

短時間とは申せ、至らぬ私の講演に真摯に耳を傾けて頂きました事を有り難く感謝する次第です。

話しを終えて、質問を頂き、さすが専門家の先生方の視点は当を得たものであると感じました。それは難問奇問ではなく、私が十分答えられる範囲のものでむしろ講演の中核に値するものでした。例えば「貴方は長い間香港にいて、香港の文化のどのようなところに関心を持ちましたか？」、この答えこそ演題に相応しい内容でありました。また若輩の息子に対し「貴方の国際的な経験を生かす方法として、学生に対しどのように伝え、どのように教えますか？」といった質問は、まさしく「文化と言語」の相互関係を、身をもって説明する根源になりましょう。言語教育に携わる諸先生方の旺盛なる研究心と情熱に感動しつつ、2時間があっという間に過ぎました。貴研究会の益々の発展をお祈り申し上げます。

多文化の環境で生まれ育った者として

岩見龍馬
［香港理工大学非常勤講師］
（岩見武夫氏　子息）

先ほど講演をした岩見の息子の龍馬でございます。若輩の身で、専門家の諸先生方の前でお話を申し上げるのは誠に恐縮ではありますが、自分自身のことについて何か話を、とのことですので、僭越ながら少々話しをさせて頂きます。

私は香港で生まれました。両親の間では英語でコミュニケーションがなされているので、私は当初、父母とは英語と広東語で会話していた記憶があります。その後３歳の時に日本へ移りました。日本へ行く以前はほとんど話すことができなかった日本語でしたが、日本の幼稚園に入ると、あまり苦労をせずに日本語を覚えたように記憶しております。やはり子供の頭というのは言葉に対して非常に柔軟であるようで、今と違い、幼少のころは驚くほど早く新たな言葉を覚える事が可能でした。

幼稚園から小学校３年生までの５年間を日本で過ごし、その後は香港へ戻り香港日本人小学校、日本人中学校と日本の義務教育を終え、地元のChinese Internationl Schooという英語のインター校へ入学しました。高校卒業後はアメリカへ留学、カリフォルニア州にあるチャップマン大学に入学ビジネスを専攻しました。卒業後、日本で５年間を過ごし、その間大学院での勉強等をし、最後に一年間上海で北京語の勉強をしました。

私は、長い時間を言語と文化の習得に費やしました。特に自分の基本とする言葉と文化である日本の言葉や習慣に対する理解に関しては、国外に暮らしていた為に未熟でありましたが、大学院の時に日本で５年間暮らした経験のおかげで、なんとか日本人の生活習慣を身につけることができました。また、４年間のアメリカでの留学生活で、アメリカの文化、アメリカ人の気質というのも理解することができました。そして、短期ながら上海への留学でも同様の理解を得ました。

これらの経験から、言語と文化は現地で実際に生活をしないと理解することはできない、ということを痛感し、また、文化と言語は相互に補完し合うものであり、片方なくしてはもう片方も理解するのは不可能だということがわかりました。つまり、その国の文化を理解したいのであれば、最低でも、その国の言葉を学ばなければならないものだと思います。しかし、その国の文化を知らなければ、その国の言語を完全に覚えることができません。つまり、文化と言語を習うためには、実際にその国に行って生活することが不可欠という事です。

このグローバル化社会において、一番大切なものは何か、そしてそれを身につけるにはどうすればいいのか、それをいち早く理解して、私に長い海外留学を許してくれた両親には先見の明があったということで、とても感謝しております。

最後に、よく聞かれる質問に、私のような多言語、多文化的な環境の下で生活する人間は、自分を何人だと認識しているか？そして、頭の中ではどんな言葉で考えているのか？というのがございます。

私自身に関して、率直にいえば国籍上、当然日本人ございます。しかし、それよりも、相手が本質的に私を何人だと思っているのかが重要だと考えています。先ほど申し上げたように、その国の言葉が流暢に扱えるのであれば、文化にもある程度精通しているわけですので、多くの場合、相手からは同国人として接してもらえるのです。たとえば、広東語がしゃべれる私は、香港では香港人として接してもらえます。アメリカで英語を話せばアメリカンとして接してもらえます。つまり、その国の言葉を話している間は、自分は身も心もその国の人間と化すのが一番自然なのではないかと考えます。従って、頭の中の言葉もその時にしゃべっている言葉で考えております。

これは父の国、母の国、育ててくれた国と、それぞれの国に対する自覚と尊敬、愛国心を持っているからできる事だと思います。

近年、グローバルな傾向として加速度的に増えている、多言語、多国籍の環境に住む人間、その中で特にこれから世の中に出る若者や学生は、公正な目でそれぞれの文化の違いをしっかり理解し、自分のルーツである祖国への尊敬を保ちつつ、自分が今暮らしている環境に敬意を払い、大局を見る柔軟な思考を持たなくては、グローバル化する世の中で生き抜くのは難しいでしょう。

稚拙な若輩者の話で、聞き苦しい部分も多々ありましたが、拝聴してくださった諸先生方に感謝の意を示すと共に、これ私のスピーチを終わらせていただきます。御拝聴ありがとうございました。

発題への私の感想

この度は、香港大学にて、しかもその道の専門家の先生方を前にしてのスピーチは大変恐縮しましたが、貴重な機会を頂いて大変光栄に存じます。講演では、諸先生方の、国際化と文化、言語に関する興味と認識の深さ、またこの分野の意義とテーマの深さに心打たれ、目から鱗が落ちたかのようです。

私自身、今度の機会を得るまで、自分の置かれている多国籍の環境に対してここまで意識することは今までなく、多くのことを考えさせていただきました。

僭越ながら、今後ともこういった場で、自分の経験を諸先生方と共有することができれば、幸せに存じます。そのためにも、より多くの国際の場へ赴き、経験を得ていきたいと考える次第です。

非常に有意義で、あっという間の２時間でした。願ってもない機会を与えてくださり、有り難く感謝申し上げます

香港における生涯学習の日本語教育の変遷

佐々木恭子
［香港日本文化協会日本語講座］

１.はじめに

現在香港における日本語学習者数は 3万人とも 4万人ともいわれている。また日本語教育機関は香港の 7大学、大学の校外課程、民間の学校（把握数 50校余）。それに、日本語を正規の教科とする一部の中学校、課外活動とする中学校、及びインターナショナルスクール２校である。これらの機関の中で、いわゆる「生涯学習」としての「成人教育」を行っているのは、大学の校外課程と民間の学校である。

ここでは、1968年に在香港日本国総領事館文化部に創立された「日本語講座」（現在香港日本文化協会所属）における日本語教育の変遷について述べたい。その理由は「日本語講座」は長年にわたり香港の日本語教育の指導的立場にあり、「日本語講座」の歴史は「香港の日本語教育の歴史」と重なると考えられるからである。日本語講座 68年の開講以来、日本語教育の方向に何度かの節目がある。とくに 92年、97年、2004年、2006年がそれである。以下、年代をさかのぼって振り返ってみたい。

２.日本語講座 39年の沿革

１９６８年　在香港日本国総領事館文化部に初級（２クラス）・中級（１クラス）設置

2学期制度で香港人講師 2名が担当。

７０年　外務省より日本人講師 1名が派遣される。在籍生徒数は、初級 132名、中級 55名、上級１クラス増設され 32名、合計 219名となる。

71年度生徒募集では、定員 200名に対して応募者数 554名となり、抽選により選抜される。第１回修了式が行われ 11名の修了生。

７１年　講座の機構改革が行われる。

初級・中級・上級を各 1年とし、計 3年を以って修了とする証書コースとなる。

７３年　国際交流基金より日本人講師が派遣される。

この年より国際交流基金より 2、3年交代で講師が派遣されるようになる。

74年度生徒募集（定員 130名、応募者数 1317名）。

７５年　研究班設置

７６年　第１回香港日本語弁論大会開催

日本語学習者の学習意欲を高める目的は現在も変わっていない。

７８年　香港日本語教育研究会設立

香港大学・中文大学・理工大学・日本語講座が中心となり、講師間の親睦と教育の向上を図る目的で設立された。

８１年　82年度生徒募集（定員 250名、応募者数 3522名）

定員 250名に対して応募者数 3522名、実に 14人に１人という狭き門である。

これは、70年代後半より日本の映画、ドラマ、歌などが香港で人気を呼び、山口百恵、沢田研二、西城秀樹らの人気が日本語ブームを起こしたと考えられる。これを第１次日本語ブームと呼んでいる。

８２年　日本語講座所属香港人講師が初めて国際交流基金海外日本語講師短期研修会に参加。日本語教育への関心の高まりがうかがわれる。

この年、日本語講座の在籍生徒総数は 962名となり、開講時の２.4倍となる。

８４年　85年度生徒募集（定員 320名、応募者数 1614名）

応募者数が 81年に比べ半数に減少したのは、これまで抽選制であった生徒選抜を入学試験制度に切り替えたためであると思われる。合格基準は「動詞のて形」までを修得している者とし、初級入門は民間の学校に任せるという形になる。

この年、香港でも日本語能力試験を開始。受験者数は 1200名であった。

当時日本語講座で使用されていた教科書は「学友会」出版の「日本語読本」。

８８年　2学期制だった課程が 3学期制となる。

９２年　日本事情クラス設置

文法・読解を中心とする授業から、日本文化を紹介する授業に一歩前進した。

日本のトレンディ・ドラマ、それにNHKの「おしん」が香港でも人気を呼び、第 2次日本語ブームが起こる。93年度生徒募集（定員 320名、応募者数 773名）で、応募者数が減少したのは、日本語教育機関の増加にともない学校の選択肢が増えたためと考えられる。

９３年　日本語講座同窓会によるカラオケ大会開催

９７年　初級入門課程・土曜日の選択コース設置

１クラスを少人数制とし、コミュニカティブを目的とした授業を行うため日本人の非常勤講師多数採用。選択コースは学習者の学習目標が多様化したため、日本語の基礎力は正課の授業で修得し、授業では習得できない日本文化や教科書にない日本語などを学びたい者、能力試験合格を目指す者などを対象に設置。

９８年　このころ行われたアンケートによると、日本語学習の目的は「日本文化への興味」と答えた者が 90%以上である。続いて、仕事、留学準備、となっており、その後の調査でも、この傾向は変わっていない。

２０００年　在香港日本国総領事館文化部に所属していた「日本語講座」が、非営利団体「香港日本文化協会」に移管される。

このころより中学生（高校生）、大学生の日本語学習者が少しずつ増え始める。これは漫画、アニメ、ゲームなどの日本のサブカルチャーへの興味がいかに高まっているかを物語っている。

０２年　会話クラス設置の要望が増え、初級会話クラスを６クラス設置。

０３年　研究専科設置（日本語講座で 6年以上の日本語学習歴を持つ生徒対象）

日本語の長期学習者が増加。

０４年　香港電台（RTHK）で「Go Go Japan 1」のラジオ放送及び e-learningが始まり、日本語講座が「教材作成」協力。

推進大使に香港のスターを起用し若い世代に日本語を広める。引き続き「Go Go Japan 2」放送開始、教材作成。

小中学生向けサマーコース・及び小中学生コース設置

低年齢層の日本語教育が本格的に始まる。日本文化の普及と楽しみながら学べる日本語を目指す。日本人講師が担当する。日本文化体験として「領事館見学」「茶道」「柔道」「着物の着付け」などの体験。

授業方式は日本人講師が直接法。期末試験は「筆記」と「聴解」に「口頭」も加える。

パワーポイント、ビジュアライザー、などの使用によるビジュアル授業も開始。

０５年　教材開発着手

小中学生サマーコース用オリジナル CDROM教材・ワークシート作成。

０６年　小中学生コース向け入門 i-pen使用テキスト「Go Go Japanese」作成。

10月には派遣中学生コース開始。

０７年　研究別科設置　ゲスト講師が担当を回り持ち。

RTHK「Go Go Japan 3」開始。日本語講座「教材作成」 i-pen使用テキスト。

３.まとめ

以上、日本語講座の歴史を振り返ってみると、20世紀の日本語教育の創世記にはほとんどの教育機関が成人の学習者を対象に文法・読解中心の授業を行っていた。1990年代から、日本のドラマ、アニメ、歌、マンガ、ゲームなどの人気が爆発、有線 TVの日本語放送開始、ビデオなどの発達により、ビジュアル授業に人気が集まった。90年代後半よりインターネットの普及で日本の情報が香港にどんどん流れ込み、若年層にも日本語が身近になる。

2000年以降は日本語学習者の年齢層の幅が中学生、小学生の低年齢層にまで広がっている。これは日本のサブカルチャーの人気に負うところが大きい。

今後の語学学習法はますます多様化すると推測される。日本語学習サイトを利用しての独学。日本と香港を結ぶ中継授業の普及。ネットによる添削授業。電子機器利用の手軽な学習（ i-pen）等々。しかし最新機器を利用する学習法がどんなに普及しても、対面授業の大切さを確認しそれを守っていくのが日本語教師の役目であると考える。

『日韓・アジア教育文化センター』の今後に関する意見交換のまとめ

〔　時　〕2007年 8月 6日

〔　所　〕香港大学会議室

〔出席者〕呂 善九・朴 且煥・マギー 梁安玉・工藤節子・武藤泰子・大橋真由美・石山由美・岡野林太郎・森本幸一・井嶋 悠

【要旨】1994年からの「国際会議」を基にしての現状と今後への展望

I　教員を中心とした発題・討議での学術的側面

日本語教育あるいは日本語教授に係る内容について

☆学術性あるいは専門性の希薄 →「明日の教室」での有効性への疑問

・他機関主催の研修等々

[例：国際交流基金日本語国際センター・国際文化フォーラム・日本語教育学会・大学研究所等・文部科学省]

☆全人性[liberalarts?]あるいは‘教養’性の曖昧さ

☆学術性ではない広さを、との意図と学術性傾向にある現状との矛盾

↓

中途半端な現状

↓

☆次項 II を重点とする思い切った質的変更へ。

☆この会議の特性を活かしての改善の可能性も検討する余地の有無。

[補遺]

○「日本語教育」への視点

・日本での「国語科教育」と「日本語教育」の連動の動き

◇日本語教育を国語科教育への導きとするタテの視点

◇日本語教育の国語科教育への有効性を見るヨコの視点

○「教育」もしくは「初等・中等教育」への視点

・専門性と全人性に係る教員・児童生徒・保護者の意識と初等中等教育

[留意点]日本での学校の社会的位置の変容、高等教育の現在

日本でのリテラシーに係る学力問題

日本での格差傾向にある学校社会と新たな学校観・制度

・日本での「海外帰国子女教育」「外国人子女教育」の新たな課題・展開

◇一層の国際化の中での日本のありよう

◇日本語教育と国語科教育

例えば、○外国籍を持つ児童生徒の日本国内での進学

○日本人学校・補習授業校での日本語教育の必要

○ 1994年の発足時、意図した上記他機関の会議、研修との差異のあらためての明確化が可能かどうか。

II　学生交流の場としての側面

①４地域[日本・韓国・中国、台湾]から、という独自性を活かすことの大切さ

☆その特性の一層の明確化と還元の広範化

[備考] 2006年上海での呂先生からの提案

②交流の一回性の克服と継続そして定着

☆2006年からの映像制作の有効性とそのことでの期待

[補遺]

○映像の芸術性と社会性の融合をどう考えるか。

○社会性での、教育視点と広く社会的視点をどう考えるか。

○制作拠点が日本であることと他の地域との関連をどう考えるか。

↓

学術性から学生交流を主体とした内容への変容の時期ではないか。

【その具体化のための提案・対策】

1.会議名称の変更

[例:国際会議→国際キャンプ]

注:キャンプとは、例えば野外活動を伴う一般的意味でのキャンプではなく、より広義な意味での用法。

2.運営スタッフとしての過去の参加者学生

→センター・ホームページを活用しての学生・大人のネットワーク形成

3.経費獲得

☆助成金

・各地域での可能性について情報収集

韓国、台湾、香港・・・・・可能性あり

[但し、2国・地域間交流や大学等を中心とした会議・研修ではないことと現状の助成の動きの確認が必要]

日本・・・・・・・・・交流の焦点を明確化することでの助成獲得

[参考:助成金情報資料]

4.学生が一層関心を持てる内容への工夫と私達の指向また感性

[例:学生達が「かっこいい」と思う内容と私達]

参加記

東アジア

河野(かわの)祐子
［日本・大阪YMCA国際専門学校国際高等課程２年］

今回の会議は私にとって世界の見方が新たに変わった機会になったと思う。最初は4日間という日数がとても長く不安に感じたけど、実際はとてもあっという間で本当に最後の日はとても別れがたかった。私にとってこの会議は初めてであり今年の開催場所は香港だった。私はそこで生まれたという不思議な縁を感じた。記憶はほとんどと言っていいほどなかった。ただ、私の中では香港で生まれた。それだけの考えだった。でも、実際にこの会議に参加したことによって新たな考えができたと思う。

この4日間は本当に濃い4日間でもあり、お互いの考え、意見、文化、言語を生で肌で感じられたとしみじみ思った。人、言葉、食べ物、ファッション、見るもの、聞こえるもの、触るものが本当に懐かしく、そして新鮮な覚えがあった。私の中ではただここで生まれた、という考えしかなかった。だが、この交流から香港で生まれたから香港人という考えもあるんだなという考え方にも気づかされた。

正直言って私はあまり東アジアのことをあんまり考えていなかったと思う。ただ欧米を中心に考えていた。そんな自分がいたと思う。シンガポールにいたときはそんな考えはなかったと思う。いろんな視点が見えていたからなのかなと思う。いざ、自分の国へと戻るとすべてが分かり、通じ、洗脳されていた部分があったんだと思う。あるときは帰国子女という名前で日本語という言語を捨てたいとも思ったりした。もちろん、帰国子女というギャップにも悩み、お決まりの型にはまる。

日本に帰ってきた今、私から聞こえてくるものは私の母国語、『日本語』がよく聞こえ、窮屈な世界に戻ったような感じがする。フルーツバスケットではなく限られたフルーツしかないような気がする。最近、私はバイトをやり始めた。今回の交流での学生の方々が日本人は『親切で礼儀正しい』と言っていた。そのとき私はあまり納得していなかったような気がするが、今になってバイトをやり始めるといろんな発見ができたような気がする。確かに、日本人は礼儀正しいと思った。『ありがとう』と言ってくれたり、細かいことにも気を使うんだなと思った。その一つの言語が簡単に通じ、何かわからないことがあれば日本語1つで誰にでも通じる。でも、その分見える世界がとても狭いなと思ったりした。

香港やシンガポールにいたときはたくさんの視点が見えていたと思う。この交流を通して改めて東アジアの見方がすごく変わり、何人とか関係なく、たとえ言語がうまく話せなくても、この交流はとても心がつながっていた会議だと思う。皆、素直に話してくれお互い素直になれたような気がした。私にとって素晴らしい経験でもあり、思い出にもなった。

若者にとっての多文化経験

岡野林太郎
［大阪 YMCA国際専門学校］

2007年、早くも 4回目を迎える日韓アジア教育国際会議に始めて参加させていただくことができた。大阪 YMCAインターナショナルハイスクールからは私と在校生一名の参加であった。日本語教員としてアジアの様々な地域での日本語教育の現状を、第一線で活躍中の教員の方々からお聞きすることができたのは私自身にとっても大きな糧となった。

しかしながら、より大きく私の胸のうちに残ったのは、会議と同日程で進行していたアジアの各地域の生徒たちの交流、交歓の模様である。私は会議に参加していたこともあり一部始終を目にすることは残念ながらできなかったのだが、同行した本校生徒の話しぶり、その内容からもいかに素晴らしい体験を生徒たちがしたのか、その一端を垣間見ることができた。

4日間、寝食を共にし、どこへ行くときもみんなで行動する。その過程で氷が解けるように徐々に生徒たちの気持ちも和んでいく。はじめは遠慮しあっていた生徒たちも、お互いのことを知ろうとし、知れば親しみも湧く。大人とは違って、妙な政治的配慮をしない子どもたちの積極性をもって互いに質問したりもする。ともすれば見ているこちらはヒヤリとするが、質問する側もされる側も変な先入観など無くただ疑問をぶつけてそれに答えているだけである。多角的な歴史観、政治的な背景にがんじがらめにされた大人にはない、純粋に互いを知ろうという希求のみが存在する。

とは言え、全くの初対面で国籍から文化的背景、母語まで違う人間が一堂に会して顔をつき合わせているのだから、表面に出る、出ないは別にして様々な不具合を感じたことと思う。

本校からの生徒も体調面に少し不安を感じたりもしていたが、それでも 4日間の日々をなんとか乗り切ってくれたことを心強く感じた。行きの飛行機の中では不安や緊張し、感じることができなかったが、帰り道に 4日間の様子を事細かに話して聞かせてくれた声からはこの経験の大きさを推し量ることができた。

帰国後に少し生徒の保護者とも話ができたのだが、本人のアジア観が大きく変わったようだということを聞けた。それまでは日本の大多数の若者と同じく欧米偏重の傾向にあったが、自分の存在と切り離せない東アジアというものを深く考え始めているようだ。言語とアイデンティティに関しても、帰国子女というレッテルが重荷になっていたこれまでのように大上段に構えず「私は私」と言い放てる強さが備わったのではないだろうか。

私といえば、まだまだ考え足らずで自分の意見も満足に言えない若輩者ではあるが、より深くアジアというものに目を向けていこうという意欲をいただけたと思う。また、日本語教員として日々帰国生と向き合っているが、中には自分の文化的アイデンティティの在り処を未だ見つけられていない生徒も多い。言語、文化、そしてアイデンティティの問題に対して自分なりのスタンスを見つけることが必要である。おぼろげながらこの 4日間を通してそのようなことを考えた。

日韓アジア国際教育会議に参加して

大橋真由美
［立命館大学大学院］

昨年は学生として参加し、各国の学生とのグループワークを通して、異文化交流、相互理解について、考えるきっかけとなり、この一年間、さらに考えを深めることができました。昨年、私自身を成長させてくれたこの会議に、今年も参加したいと思い、参加させていただきました。今年は、昨年とは違い、学生としての参加ではなく、会議の一参加者として、様々な方々のご発表、ご意見を伺うことができ、多くのことを学び、また新たな視点を持つことができ、とても有意義な会議でした。

また、今回は、学生会議を外から見ることができ、学生同士の交流の深さ、他者を理解することの柔軟性に驚きました。特に、学生会議では、学生同士、動物に例えてもらい、先生方に当ててもらうことをしたのですが、先生方の答えと学生の答えが違い、先生方が知る学生とは違った人間性を学生同士には見せていたのか、それとも、この数日間の学生との交流を通して、変化したのか。どちらとも言えませんが、学生同士、お互いを理解できた成果ではないでしょうか。このような学生同士の交流を通して、小さな相互理解の波紋が、やがて大きな波となって、世界に発信できることを願っております。

このような会議に参加できたことに感謝し、これからもこのような会議が続くことを願っております。

個性を演じた若者達

逢坂芳郎
［映画制作］

香港へ旅立つ前、映画の撮影準備をしながら、里才門君と二人で「言葉とアイデンティティー」について長い間議論をした。私の場合、まず北海道で生まれ育った日本人と言えるが、大学生の多感な時期にアメリカで 5年半住んだ経験があり、その現地の言語と文化が自分のなかに確実にある。日本とアメリカが自分のなかにある。去年、初めてアジアの国に訪れた。上海で東アジアという言葉を聞いて、ハっとし、自身のアイデンティティーを改めて考えるようになっていた。

香港で、映画の主人公になる学生達は、東アジアの同年代と交流して、どんな発言をして、自身のアイデンティティーについてどう結論を出すのだろうか。実は「結局私達は東アジア人として繋がっているんだ」というような着地をしてはくれないかと理想を抱いていたが、それは浅はかだったと後悔する。彼等の意見は実に様々だった。誰も同じ意見は持っていなかった。言語を考える人、家族を考える人、生まれた場所を考える人、現代社会を考える人、歴史を考える人、未来を考える人。これらを映画にまとめていくのは大変な作業になりそうだ。しかし、それと同時に、嬉しい気分である。カメラの前で、それぞれが自分の考え（個人言語）を使い、自分（個性）を真に演じていたから。そして、私自身を含め、その様々な個性がそれぞれを理解しようとし、尊重していたのではないか。そうやって東アジアをみつめてみないか。この思いを今回の映画で表現したいと思っている。

最後に、この場を借りて、香港でお世話になった先生方、現地の学生の皆に感謝の気持ちを送ります。

香港：Hong Kong

里　才門
［映画制作］

香港はとにかく画になる場所であった。この様な事をいうと他の都市は画にならないのかと言われるかもしれないが、もちろんそんな事はない。ただ、香港からは独得の「色気」が感じられたのだ。目眩すらおこしそうな超高層ビル群。その間を行き交う車と人々。亜熱帯気候特有の熱気。ところ狭しと生い茂る木々より溢れる生気。街そのものが徐々に肌に染み入る感覚と、今にも何かが起こりそうな雰囲気。上海、東京、ソウル、北京、台北とは、あたりまえだが、異質のエネルギーの中、少なからず圧倒されながらも我々映画制作隊は今回も学生達を追った。そして香港は個々の学生が抱く思いの発露の場として、発意のきっかけとして、最高の舞台を提供してくれた。

驚いたのは、香港は想像していた以上に私に強制発想を誘発させる街であった。私自身の背景でもある英語と日本語を使用する文化によるバイカルチャリズムとの共鳴からなのか、会議の性質上「言語」に対してより敏感になっていた中、香港では自然に（必然的に）生活の中から広東語、北京語、英語、その他の言語が使用されている事実が実際の音として私の中に飛び込んできたからなのか。未だ私の中で整理がついていないが、香港の昼の喧噪と夜の静寂は東京に住む私の日々の感情を具現化したような不思議な情調として撮影中私を包んだ。「香港」「Hong　Kong」。何かが脈々と積み重なるのを感じたのだが、何であるのか… 画になる場所。色気のある街。（正直、刺激が強すぎました）

撮影をする機会を与えて下さった皆様、カメラの前で発言をした勇気ある学生達にこの場をかりてお礼を申し上げたいと思います。

参加記

粟田経弘
［映画制作］

描いていた香港のイメージは町中にあふれる人々と中華料理屋。自分が中華圏で仕事していたこともあり何となく分かっていたつもりだった。実際に目にする街は創造以上に人と物にあふれた港町の香港らしいユニークな街でそこに住んでいる人もまた独特の文化を持っていた。

香港で出会った人々に驚かされたことは、単純に言語能力や適応力が高いというだけでなく、それをサポートする設備や環境に恵まれているところだろう。彼らの多くは、物心つく頃には英語を学び始め学歴社会の中で生きて行く事になる。彼らの言葉で印象的だったのが、学生達は自分の意思で日本語を学び、日本語のことを“本当の意味での第二外国語”と言っていたことだ。彼らは日本のアニメや映画、また音楽等を通じて日本語という言語に触れ、自らの好奇心や周りの日本語を勉強している友人や学校の先輩などの影響を受けて勉強を始める。

台湾や韓国の学生もまたそれぞれ違った環境の中で勉強しているが、彼らに共通している意識はさながら日本人が欧米諸国を見るような目のようであった。おそらく日本人が英語を勉強するのに足りないのはこういう文化の触れ方なのだろう。彼らが日本語を理解せずに日本語のゲームで遊び、アニメなどを見ながら少しずつ言語に対しての環境や興味が出てくるのに対して日本ではゲームは大部分が日本製で、映画もテレビも吹き替えの物を見る。もちろん日本以外の東アジア圏でも吹き替えのものはあるが文化に対する興味で産まれてくるものの差は大きく、一見日本の方が便利に見えるがそれと引き換えに失っている機会も多いのではないだろうか。

アイデンティティと言語

森本幸一
［小林聖心女子学院小学校］

香港。そこは、高層ビルの林立するアジアにあってニューヨークのような雰囲気の混在する場であった。われわれが宿舎として使わせていただいた香港大学の学生寮「スターホール」も、まさしく聳え立ち、眼下には船の行き来する海が輝いて見えた。その香港で私たちはマギー梁安玉先生始め香港の先生方、香港大学の学生さん達の多大な尽力により「第４回　日韓・アジア教育国際会議」を開催することができたことに心より感謝したい。

今回のテーマは、「モノリンガル・バイリンガル・トリリンガルと自己表現と言葉の教育」であった。モノリンガルである私にとって、少し後ろめたいテーマであったが、バイリンガルである里才門君の話された事柄、「日本語を話すことによって日本人である。」「アイデンティティから言語をつくる。」「英語で話していると、日本語ではこう言うのにと思うと悲しい。」は、アイデンティティと言語の関係を考えさせてくれる大きな鍵となったように思う。

即ち、私自身が私であること「アイデンティティ」の内面（心・精神）の確立・確認は、時と場、あるいは、何国語でするにせよ、言語で行うのである。その言語の幅広さが、バイリンガル、トリリンガルの方々は、大きな視野の中で物事を見ることのできる可能性がある。例えば、狭い世界の中でのさまざまな偏見や差別は、大きな視野から眺めるとつまらないちっぽけな物に写るであろう。が、同時に広い視野が持てるが故の自己確立の難しさ、苦しみ「アイデンティティ・クライシス」も伴うのである。この「危機」は、しかし、モノリンガルである私にとっても同様で、「私の真に思うこと」を探し出せないで、暗い闇の中にさまよう時、心は嵐のように騒ぐ。そして、満足のいく言葉（表現）がみつかった時、心に平安が戻り、満足感に満たされる。言葉はあたかも自分自身の鏡であるかのように。とは言っても、その自分探しの言葉が、単一でないということは、グローバル化、情報化の現代にとって大変重要なことであることに間違いはない。

また、今回は、学生交流の様子を逢坂芳郎監督を中心に映画として詳細に記録する２回目の会議となった。東アジアの韓国・中国台湾・中国香港・日本の学生が集い、３日間をどのように過ごすか自分達で決め、今回のテーマに関して自由な活動をする中で深めていった。今後のこの会議のあり方については、学生交流を中心に行う意見が大勢を占めたが、学生達の息の長い交流活動を推進していくためのネットワークづくりとその核となる若いリーダーの養成が重要となろう。

閉会の挨拶でソウル日本語教育研究会の呂　善九会長は、「マンナル」の歌を全員で歌うことによって、この会議を「出会い」の喜びの内に閉じて下さった。

来年もぜひ、東アジアの若者にこの「出会う」喜びを味わってほしい、と思った。

香港での学生交流感想

金（きむ） 浩顯（ほひゅん）
［韓国・光新高校 2年］

私は今年の夏休み中、貴重で目新しい体験をしました。はじめて行った国際都市である香港で多くの国の学生に会って交流をしました。香港は中国でありますが、中国とは異なって多様な文化や價値などが混合されているし、香港人の使う言語も広東語や北京語や英語などが混ざっているようです。このようにアイデンティティが混ざっている香港は国際交流をするのに最もあつらえ向きのところだと思われます。

私は台湾の学生、香港の 学生、日本の 学生たちといっしょに香港のあっちこっちを歩きまわりながら多様な体験をし、いろんなことについて考えるようになりました。そしてお互いの心を理解し、相手の文化に対して深く理解できました。交流のはじめの日は自己紹介をしながらお互いに親しくなりました。次の日から本格的に交流をしました。香港市内を歩きまわりながらいろんなことを買って食べたり見物したりショッピングしたりしました。香港の名物である 2層バスとトラムにも乗ってみました。わが国にもこのような交通手段があったらと思いました。香港のメトロであるMTRにも乗って見たが、ソウルのメトロより路線が短く、一輛の長さが短くてかわいかったです。いちばん印象的な交通手段はペリでした。少し古かったですが、値段が安くて香港のスカイラインを見るのに当てはまるものでした。

夜は百万ドル夜景だという香港夜景を見ましたが、本当にすばらしかったです。わが国にも新しいビルを立てる時、あたりの環境と景色を参考したら香港ほどすばらしいスカイラインを持った都市になるはずだと思います。

香港の食べ物もたくさん食べてみました。シュマイ 饅頭などやいろんなデザートを食べて見ました。少し口に合わなかったものもあったが、たいていおいしかったです。特に蝦がはいったシュマイと胡麻を下ろして作った冷たいスープが印象的でした。

もっと多くのことを体験したかったんですが、時間がはやくすぎさってしまいました。もっとお互いに対して話し合いたかったのに…。会議の最後の日、私たちの交流したことに対して発表しました。先生方々の前だから声がふるえてよくできなかったです。後で呂先生に「人の前で何か発表するときは手振りや身ぶりに気をつけてね」と言われました。これからもっとがんばろうと思いました。

今度の交流はみんな異なった国で異なる文化や背景を持って生きてきましたが、私たちは国というかべを乗り越える何かがあるということを感じられました。みんな東アジアに住んでいるし、日本語を勉強しているなどの外面的な共通点ばかりではなく、内面的にも 共通点がたくさんありました。ただ背景だけが違います。お互いを理解し、心をくばりました、そして今度の交流を通じて東アジアの人々がもっとひとつに結ばれる可能性も発見しました。それからこの交流の幅がもっと広がっていってほしいと思います。

今も Eメールで交流をしています。あとでまた会うのをお楽しみにしています。このような交流ができるように尽力をつくしてくださった先生方 に感謝致します。

東アジアからの青い漣が大きなうねりになるようお祈り致しながら

呂 善九（よ そんく）
［ソウル日本語教育研究会 会長］

私がこの会議に参加し始めたのは1996年第3回韓日教育国際会議からである。その時から1回も飛ばさなくて参加してきた。

この会議を通じて私個人的に、また研究会、センターは多くの変化があったし、発展してきたと思う。この会議を通じて日本語を教えている教師としての専門性、正体性、役割などについて深く考えるきっかけになったし、多くのことを見習った。

その中でも学生交流は私にとって最も意味があるものだった。と言うのは1997年第1回韓日青少年交流のためのネットワークフォーラム（大阪）と1999年第2回韓日青少年交流のためのネットワークフォーラム（ソウル）の教師分科に韓国側リーダとして参加しながら青少年交流の重要性をしみじみと感じられたからである。これがきっかけになってうちの高校でも2000年から日本及び中国のほうへテーマ旅行を実施しているし、取り分け2004年からは東京にある成蹊高校と毎年学生交流を行っている。

交流を通じて学生たちは本当に貴重な体験をする。はじめはなんとなくいやだ。気まずいという気持ちが短い時間にも関わらず、いつのまにか親しくなる。お互いを少しずつ理解していく。私はそこでこれからの友好的な韓日関係の可能性を発言した。とともに日韓・アジア教育文化センター主催のいつつの地域（日本，ソウル，上海，台湾，香港）の学生交流は韓日のみならず東アジアへの幅が広がって各国の異文化を体験し、理解し、とりわけ多言語（韓国語、日本語、中国語、語，英語）で交流ができるのは他のところでは見えないこの交流会の長所であり、特徴である。

去年上海での交流は特に印象深かった。というのは自分の関心がある分野別に組み合って討論し、人に会って直接意識調査をし、それをまとめてパワーポイントを利用して発表したことだ。そしてリレー通訳でお互いにコミュニケーションができたのはおもしろく、珍しいことである。

上海での3日間を記録した「東アジアからの青い漣」という映画を作ったのを見て誠に感銘深かったし、今年香港であった学生交流も相次いで映画を作る予定で作業をしているようだ。

今年の香港での国際会議や学生交流会は私にとって特別だった。個人的に始めて行ったところであるし、いろいろな国の人たちが集まって多様な文化が混ぜて暮している国際都市だった。

講義の中では「国際化の中での言語教育」と言う題目で発表なさった岩見武夫香港柔道館長のお話が印象的だった。40年前、日本から香港に来て日本の柔道を普及させるのに困ったこと、その後今までの生きてきた過程、とりわけ香港の女性と結婚してコミュニケーションを英語で、お子さんに母親は広東語で、父親は日本語で話しかける。また両親のコミュニケーションのための英語、すなわちおこさんは育ちながら3つの言語を自然に習ったということだ。岩見龍馬さん（岩見武夫館長のお子さん）に「どの国の人ですか」と聞いたら自分は日本人であり、香港人であり、国際人であると答えた。もう国の壁を乗り越えたようだった。

今回の交流会に上海からは参加できなくて残念だったが、４つの地域（日本、ソウル、上海、台湾、香港）で集まった学生たちの交流は東アジアからの青い漣が大きなうねりになっていく架橋だったと思う。そして学生交流を通じて明るく平和な東アジアの未来を見通すことができた。そうだ。東アジアからの青い漣が大きなうねりになるよう先生たちがこれからもっと頑張るべきだ。

忘れられない旅

林 暁婷（りん しゃおてぃん）
［台湾・高校２年］

今回、香港の旅行はただ楽しい旅行というだけじゃなくて、もっと深刻で大きなインパクトを受けた楽しい旅行でした。その中にいろんな始めてのことが含まれていると思います。それは、日韓アジア教育国際会議に参加すること、五日間四国の学生と一緒に暮らすこと、自分の感想をスピーチとして発表すること、毎日スターのように撮影されること、そして、最高のことは全員が友達になることです。香港に行って、起こったことからはそれぞれとっても不思議な感じを受けて、いっぱい習って、考えることになりました。

この五日間、ほとんどユウコさんと一緒に暮らしました。この間、全部日本語を使います。でも、コミュニケーションするとき、言語だけじゃなくて、他の話し方もあるということを知りました。それは、ユウコさんとしゃべっているとき、一番明らかになったことで、もし会話中に意味がわからないとき、二人とも身振り動作を含めてもう一度話したら、よくわかりました。

こんな経験のおかけで、今もし日本人に出会ったら、昔よりもっと自信を持って、しゃべれると思います。そして、ユウコさんは日本人ですが、出身地は香港です。しゃべっているとき、この背景を持っているユウコさんは香港に深い考えを持っているそうです。それもびっくりしました。まだ19歳のユウコさんはもう自分自身のことを考え始めています。逆に19歳の私を見ると、あんまりこんなことを考えないと思います。でも、これからは少しだけ自分自身のことを考え始めようと思います。

「どうして私は台湾語を話せないのか。」台湾語は私の母国語ですけど、話せません。実はこの会議に参加する前に、台湾語についてあまり興味がないので、習いませんでした。でも、この会議のおかけで、もう一度自分の母国語-台湾語を理解したいので、少しだけ習っています。今回、会議で出会った韓国人のキムさんは中国語に熱中していますからいつも質問をしました。それに話すのではなくて、もし文章を読んだら、お互いに漢字で通じるからいいとも言いました。それに、キムさんは台湾語のことも聞きましたが、私は台湾語ができないので、答えられません。そのとき、突然台湾語は特別な台湾の言葉なのに、私は習いたくなくて話せない、ということに気がつきました。

本当に恥ずかしいと思います。特に、皆と出会ってから、台湾語を大事にしたいと感じるようになりました。台湾語は台湾のもので他の人に紹介できる、すごく大切なものと思います。ですから、これからは台湾語が大事にしたいです。

「私たちは大家族。」実は、香港へ行く前に、自分は台湾人という思いがあって、ほかの人と友達になれるかどうか、心配していました。でも、行ったら、皆親切でやさしことが交流してわかりました。特に、香港の友達は急に私に香港人のように広東語をしゃべってくれて、びっくりしましたけど、本当にうれしかったです。この意味で皆同じなんだな、と思って、来る前のそんな不安感がなくなって安心しました。

今、皆は東アジア人という意識がありますが、将来はもし機会があれば、皆は地球人と思うかもしれません。今回、皆は親切で大家族みたいな感じを与えてくれて、今までも本当に感動しています。これは忘れられない旅だと思います。今回、参加させていただき、本当にありがとうございます。

参加記にかえて

武藤泰子
［台湾・環境技術学院］

香港での会議が終わってからも、ずっと気になっていることがあります。それは、会議 2日目、午後のドキュメンタリー映画をめぐってのワークショップのことです。

昨年の活動のドキュメンタリー映画のダイジェスト版を見たあとで、皆がそれについて意見を言っているときでした。学生の一人が「できれば学生たちが公平にスクリーンに登場してほしい」という意味の発言をしました。それに対して「なるべくそうしたい」という発言が映画製作に関わる人から回答としてありました。その後、話題は他のことに移っていきましたが、その後、別の教師側（大人側？）から「映画を製作する人は、考えがあってしているのだろうから、学生が公平に登場するかどうかは考慮しなくてもいいのではないか」という発言がありました。それに対して、映画製作側から「そう言っていただけるとありがたい」という趣旨の発言がありました。

以上のやりとりは、私個人の記憶であって、もしかしたら、事実とは違うかもしれません。でも、私は少なくともその時の出来事を、以上のように記憶し、当時、なんとなく感じた腑に落ちなさを抱えたまま今にいたっています。

「学生が公平にスクリーンに登場するように…」という発言は、私は自分の中でこう解釈しています。―ドキュメンタリー映画の中では、何人かの学生が目立っていた。それは、映画を見ると、あたかも、主役級の学生と、それ以外の脇役の学生のように、見ている側には写ってくる。しかし、参加している私（学生）にとっては、どの人が主役で（言い換えれば「印象が強く」）、どの人が脇役ということもなく、そういう意味では「公平」に、自分の中に存在している。それが、映画の中では、ある学生がより鮮明にある学生が印象の薄い存在に描かれている。もし、今の自分たちの活動もこのように描かれるのだとしたら、自分が思っている活動と描かれる活動に乖離が生じるので違和感がある。―

この解釈が、学生が思ったことと同じかどうかはもちろんわかりませんし、たぶん違うのではないかと思います。しかし、学生の発言からこのように想像した私は、「映画製作者側の都合で決めればいい」という一応の結論は、何か違うのでは…と感じました。映画は、映画の作り手のものかもしれませんが、撮られる側のものでは全くないのでしょうか。映画で構成される前の現実にいる人たち、現実を再構成する人たち、再構成された現実を見る人たち、その三者が今回は集まっていました。そのような機会はあまりないことではないかと思います。その意味で、もう少し、その三者が意見を交し合うことがあのワークショップの最大の意義だったのではないのか、と今さらながら思います。

なんとなく違和感を覚えながら、私はその時、沈黙してしまいました。ただの見る側の人間が意見を言うことではないのではないか、そんな思いが自分にはあったように思います。

普段、別々の社会で生活し、お互いにあまり言葉を交わすことがない人たち同士が集まって、意見を交わす、それは本当に難しいと感じました。そして、自分がその難しさを越えようとする気概も、些細な努力も怠っていたような気がしてなりません。逆に、映画の中の学生の皆さんは、気概もあり、意見を交し合おうと模索している姿を感じることができました。このような出会いを作ってくださり、準備や当日の手配、進行をしてくださった方々には、私の思いも及ばないような大変さがあったことと思います。ここで改めて御礼申しあげます。そして、その努力が実を結ぶためには、参加者として、苦労しなければ…と思っています。

参加記

黄 倩婷（うぉん しんてぃん）
［香港嶺南大学］

今度の交流会に参加させていただき、誠にありがとうございました。

こんなに他の国からきた人々と日本語や文化を交流するのは初めてでした。最初、みんなお互いを知りませんでしたけど、やっと友達になって、本当にうれしいです。みんなと交流している間、他の国の文化はもちろん、香港だけの文化も新しい観点から見られさせてもらいました。例えば、忙しい街にトラムとかスターフェリーとかゆっくり走っているのは、人々にのんびり時間を過ごす楽しさを覚えさせて、バランスをとっているのです。効率に自慢している香港人にとって、それは忘れていくものです。

また、香港はいろいろな面から日本に影響されていることで、日本語のメニューを用意している店が多いです。そこで、面白いものをたくさん見せました。例えば、「ミルク」は「ミルタ」と、「フルーツ」は「フルーッ」と書いてあります。日本人にやさしいつもりだったけど、ちょっと中途半端じゃないかとそれからずっと思っています。それは日中文化交流はまだ続かなければならないと反映し、日本語を勉強している香港人として、私もその力になりたいです。

今度の交流会は香港で行われましたが、街の案内とか用意不周到なところはたくさんと思っています。皆さん我慢してくれてありがとうございます。もし機会があれば、みんなもう一度集まって、どこかでデザートを食べましょう。

参加記

陳 禮斌（ちぇん らいぶん）
［香港大学］

今回の日韓アジア教育国際会議に参加して、いろいろなことを習いました。はじめは、マギー先生に香港の学生代表を選ばれて、嬉しかったですが、いったい何をするのか全然わかりませんでしたから、迷ってしまいました。でも、あのとき、会議の日を楽しみにしていました。ほかの国の学生も参加して、交流ができて、日本語を話すチャンスがあると思ったのです。

一日目には、カメラマンの三人と井嶋先生と会って、ちょっと緊張しました。初めて日本人と一緒に食事したり、おしゃべったりしたりしたのですが、カメラマンの三人に日本語をたくさん教えてもらって、井嶋先生にも人生観や日本文化などを教えていただきました。それに、先生はいつもおもしろいことを話しましたから、香港の学生たちをあっという間にほっとさせました。

そして、ほかの国から来た学生たちとすぐに友達ができました。みんなは大体同じ年ですから、共通話題がたくさん出てきました。その上、日本から来た学生だけではなく、韓国から来た学生もいるし、台湾から来た学生もいるし、異文化がたくさん教えてもらいました。そして、みんなと一緒にあちらこちらへ香港を観光に行った時がとても楽しかったです。夜、みんな寮へ帰ったら、いろいろな話題についてしゃべりました。三時まで起きていて、絶えず交流していたことは私の人生にとって本当に宝物のように貴重だと思います。

ところで、発表のテーマとカメラマンの三人にインタビューされたことは、自分のアイデンティティを考えさせました。以前は、自分はどこの人という問題をはっきり考えたことがありませんが、今は、じっくり考えるようになってきました。私は今年二十二歳なのです。若いですが、もう子どもではないと思うのです。日本語を勉強している私は将来日本関係の仕事をしようと思っていますから、アジアが今後どうなっていくかなと考えざるを得ないでしょう。

最後に、今回ご参加なさいました先生方が、いろいろなことを教えてくださって、どうもありがとうございました。もしチャンスがあれば、ぜひ次回の会議に参加したいです。ほかの国から来た人々との交流によって、教室で勉強できないことを勉強できるのです。

日韓・アジア教育国際会議　参加記

陳（ちぇん） 嘉浩（かほ）
［香港城市大学］

今年の夏にアジア各地の日本語学習者と日本語勉強の交流をして本当にうれしかったです。何日間日本語でしかコミュニケーションするのが初めてなので、ちょっと微妙な感じをして最初のときにはなかなか慣れられませんでした。しかし、ずっと日本語で話したかな、二日目の夜に夢を見てたときに、夢にでも日本語を話しました。翌日の朝起きたあとびっくりだと思いました。それだけではなく、会議が終わったあとにでも、うちで両親に日本語を話してしまいました。まるで外国語勉強の新の境地に入ったようです。

今回の交流会はホンコンで行ったから、わたしたちホンコンの学生はガイドの役もしました。ホンコンにはどこがおもしろいとか、食べ物ならどこで済めばみんな喜んでくれるなど、外国人の学生たちと３人のカメラマンに満足させるには本当にたいへん力一倍だったです。なぜかというと、わたしたちはホンコン人だから普通ホンコンについてのことは考えていません。「今夜のメシはどこにしよう？」「恒例のあそこだ！」、或いは、「日曜日どこへ行く？」「モンコクかコースウェイベイ、どっちへ行きたい？」。わたしたちはこんな退屈な日々を繰り返しているんです。あんまりホンコンの名所や旧跡へ行くことがないので、外国人に「ホンコンだけのところへ行きたい」と聞かれたら、ホンコン人はいつも迷ってしまいます。正直に言うと、今のホンコンの若者はみんな新しい物事しか追求していなくて、自分の地元の素顔が全然分からないかわいそうな人たちだと言っても過言ではありません。そこで、わたしたちはホンコンというところにもっと深く理解すべきだと覚醒しました。

また、今度の交流会には韓国人のキムさんと台湾人のリンさんもいたので、言語の勉強が大好きのわたしはふたりに韓国語と台湾語を勉強するチャンスも見逃さないように、あちこちで見物かたがた、いろいろな物事の言い方を聞きました。一方、キムさんもわたしに広東語や中国語についてたくさん聞きました。しかも、わたしにも韓国についてのこと、面白いところとか、伝統的な食べ物など、何でも教えました。教え子としてキムさんにとてもすばらしいことを勉強しました。それは、新しい知識を求めるうちに、もう身に付けた知識を忘れないことです。それこそ本当の交流に違いありません。そんなキムさんと比べて、ホンコンのことぜんぜん興味なしでちっとも分からないくせに、ほかの国のことしか追及していないわたしは面目がないと思います。わたしもホンコンのことをちゃんと理解しなければなりませんね。

わたしは本当にいろんな言語を勉強することが大好きです。このわたしの心のよりどころは、わたしの求知心をずっと燃やしていることにずいぶん役に立っていると思います。今回の交流のおかげで、わたしは言語の勉強にもっと興味深くなったのみならず、このうつくしい地元、ホンコンに改めて理解するチャンスを頂きました。もう一度交流会があればいいなと思います。

皆さん、本当にありがとうございました。

参加記

趙（ちゅう） 浩澄（ほていん）
[香港中央大学]

If I have to choose one word to represent how I feel about this exchange programme, definitely I would say — amazing.

The 4-day-programme gives me an invaluable chance to communicate with other people by Japanese language. I enjoy the time very much because I like talking very much, especially using Japanese. Actually, I did not have so much chance to speak Japanese, since I stopped going to a Japanese language school. Besides, I am very glad to know the new friends, especially those from other countries. Kim-san, Yuuko-san, Rinrin-san, Kou-san, and Chin-sans, they are all very nice and I feel very lucky to make friends with them. The time we traveled around Hong Kong together definitely gives me precious memories. Also the 3 cameramen, Nobu-san, Oosaka-san and Simon-san, have shared their valuable life experience to us and we learnt so much. Also, The most unforgettable event in those 4 days was the presentation on the last day. It is a very good experience for me that I have to deliver a speech in front of so many people.

Lastly, I would like to thank all the people who are responsible for organizing this meaningful event. Without their great enthusiasm, definitely I cannot get such a good chance to broaden my horizon and have this once-in-a-life experience.
Thank you very much!

「私は地球人です」── 多言語話者のアイデンティティー

マギー梁 安玉
［香港大学　現代語言及文化学院］

第四回日韓・アジア教育国際会議が 2007年 8月に香港で開催されたこと大変意義深いと思われる。まず今回の会議で、改めて対面の交流の大切さを再確認できた。近年、インターネットの急速な普及によって、電子機械を通して、異国の人間と迅速に交信できるようになった。しかしながら、このような交信は生身の人間と対面するような交流ではないので、人間的な暖かさが欠けている場合が多いだろう。だが、2000年以来、毎年日韓・アジア教育国際会議で出会った先生方と学生との交流はとても人間味の満ちているもので、人生の素晴らしい糧になっていると思う。

それに、今回香港で会議が開催されたお蔭で、香港側の責任者として、日本、韓国、台湾などの地域の先生方と学生とかなり頻繁な交流ができて、国籍、アイデンティティーと言語との関係を考えさせられた。

まずは、元イギリスの植民地で、現在中国の特別行政区になっている香港で、日本語が会議の正式用語として使われることは言語は国境を超越しているもので、時には国籍とは全く関係のないものだと改めて感じさせられた。何しろ、会に参加していた日本、韓国、台湾、香港の学生の共通語は日本語なのである。それに、若者の皆さんは少なくとも、二つ以上の言語ができることに感心しながら、これこそ二十一世紀の若者のあるべき姿ではなかろうかと思う。

これからの人間は多言語能力を備え、国籍やアイデンティティの枠を越え、堂々と人間同士として付き合っていけるのではないかと心から期待している。

従って、学校教育、特に小中等教育における外国語・異文化教育がますます重要視しなければならないと思う。聊か極端な発想になるかもしれないが、今後小中等教育では、語学力と異文化認識の訓練と習得を主要学習項目として扱っても良いのではないかと思う。高度の語学力を身につけておけば、高校や大学ではどんな専門の勉強もできるはずである。それによって、どこの地域の人とも付き合えるし、人間関係、国際関係もより円満にでき、国籍やアデンティティが関係なく、和気藹々で互いに尊重しあって、本当の「地球人」になれるのであろう。

言うまでもなく、このような「地球人」を育てるには日韓・教育文化センターの使命ではなかろうか。今回の会議のお蔭で、若者の対面交流が教育の重要な一環であることを再確認できた。微力ではあるが、センターには何か貢献できたらと願って、今後とも、頑張っていこうと考えている。

第４回日韓・アジア教育国際会議に出席して

金（きん） 秀芝（すうじ）
［国際交流基金海外派遣日本語教育専門家］
［香港日本語教育研究会］

私個人にとって、この会議に参加するのははじめてのことであったが、香港に赴任して１ヶ月しか経っていない時期であったため、アジア圏の教師との交流の場として、また香港の教育事情の情報収集の面からも、非常に有意義な機会だった。

初日の講義では、日本、韓国、台湾、香港のそれぞれの発表から現在抱えている問題、配慮している点など、現場の声を聞き、また質疑応答の機会が得られたことは大変ありがたかった。

特にマギー梁先生による「香港の教育改革における言語教育政策と多言語社会の行方」、佐々木恭子先生による「香港における生涯学習の日本語教育の変遷」は、香港の教育事情を俯瞰的に把握する上で非常に役立つ内容だった。

また、韓国の先生方との懇談では、現在の中等教育における日本語教育事情についてお伺いし、具体的な資料送付、来年度の国際学会に関する情報を得るなど、今後の香港内での業務に非常に役立つ情報を得ることができた。

会場運営面では、香港大学の由緒ある講堂を手配して頂き、外国からの参加者に対して学生の案内を付けて下さるなど非常に細かい気配りが行き届き、何の不便なく会議そのものに集中することができた。国際的な会議にも関わらず、井嶋悠先生、マギー梁先生など限られた人員での準備だったようで、そのご苦労が偲ばれる会義だった。

一つ残念な点を上げるとするなら、香港内での広報が若干遅れたこともあるのか、参加者数が若干少なかったことと、二日目のワークショップの内容が初日と直接的な関連が薄く、学生交流のドキュメンタリー映画の経緯に関わっていない参加者には意見交換が難しい内容だったように思う。

最後の日韓・アジア教育文化センターの今後に係る全体意見交換会には、残念ながら参加することができなかったが、おそらくこの場で活発な意見交換が行われたのではないかと期待している。

それぞれの講演の内容はどれも具体的で傾聴に値する内容であり、講演だけでも十分意味があったが、このような国際会議は、各国の教師との意見交換、情報提供の場として、その場に参加することだけでも非常に意義のあるものだと改めて感じた。

全体での議論やワークショップの内容については、講演のテーマとリンクし、より活発な意見交換が出るような、日ごろ問題意識を抱えているものに設定すれば、より活性化したのではないかと思われた。

いずれにせよ今回の会議には、多国籍の現場の教師だけではなく、その受け手である学生が同じ場に集まって、一つの作品を通して交流するという新しい試みがあった。そういった意味では、適切な参加人数だったとも言える。

このような場を設けてくれた主催者及び、講演者、会場提供者、そして参加者と学生たちの労に改めて感謝の言葉を送りたい。

学生交流ドキュメンタリー映画のご案内

上海

『東アジアからの青い蓮』(上映時間 65分)

監督・撮影・編集：逢坂芳郎・里 才門

出演：上海・香港・ソウル・台北・東京・神戸・京都の高校生大学生

特別講師：池 明観氏(韓国)

香港

現在、制作助成獲得を模索しながら、編集等制作中

監督・撮影・編集：逢坂芳郎・里 才門・粟田　経弘

出演：香港・ソウル・台北・大阪の高校生大学生

20007年度版概要

この映画は、大阪・ソウル・台北からの各 1人、香港からの 4人、合わせて 7人が、香港で出会い、日本語を共通の言葉として交流を深め、絆を形成して行く 3日間が描かれている。或る者は、世界の多くの言語への関心を、或る者は、世界各地で仕事をし、祖国に戻る夢を、或る者は、少数者、社会的弱者への眼差しを、或る者は、情報を力に世界羽ばたく近未来の自身像を、或る者は、外国での出生以降の国内外での移動生活からの心の軌跡を、・・・。国際化真っ只中にあって、次代を担う一人として。

私たちは、今回日本から参加した日本人女子高校生に焦点を当てた構成を考えている。彼女は香港で生まれ、その後、神戸・シンガポール・東京と移り住み、シンガポールからの帰国後に経験した不登校を克服し、今大阪で高校生活を送っている。

彼女は、正に国際化を、海外帰国子女(生徒)を象徴する存在であり、その途方もない 17年間の軌跡から、今、自身、日本人としての自身を、そして日本を考え始めている。

私たちは、その彼女と、昨年参加したハワイで生まれ、帰国後の中学校で不登校となり単身生地に戻った日本人女子高校生、また昨年の講師である韓国の池 明観氏の、東アジアそして日本への思いを語る言葉を重ね合わせながら、7人の活き活きした交流を、東アジアの日本から、国際化、グローバル化と次代を考える映像メッセージとして送りたい、と考えている。

“ 東アジア人 ”といったことも考えながら。